

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

特 231

914

高等科第一二學年之卷

比々多讀本

比々多尋常高等小學校

特231  
914

高等科第一二學年之卷

# 比々多讀本



比々多尋常高等小學校



比々多村之圖

大日本帝國陸地測量部二萬五千分一，原圖ニヨル

昭和六年七月寫



所 感

比々多讀本の全巻方に成らんとするに際し、前任重田先生は過去五箇年間生みの親としての艱苦を残して葉山小學校へ榮轉せられ、不肖私が後任を命ぜられた。素より育ての親として其の資に乏しきを省みつゝ聊か所感を述べて指導に編纂に終始絶大なる盡力を賜はりし關係の各位に深甚の謝意を表する。

本校の教育はよき日本人への教育であると共によき比々多人への教育である。いやが上にも優れたる比々多人の養成によつて、よりよき比々多村の建設を根本の方針とせねばならぬ。健全なる身體と剛健なる精神とを有し、隣人愛郷土愛より懸て國家愛に燃ゆる村民の育成を目的とすることが必要であると信ずる。

比々多村は農村である。農村は特に健實なるべきだ。やゝともすれば時代は農村よりこの健實味を奪ひ、眞の建設眞の發展を阻害せんとする。爰に於て健實なる郷土の建設には過去の文化を採ね現實の相を明察して以て將來に邁進せねばならぬ。昭和御大典の記念として夙に本書の編纂を企圖せられし學校當局並に村有志者の卓見に對し滿腔の敬意を表はすものである。凡ゆる方面より渾成すべき比々多魂の覺醒啓培こそは郷土百年の大計にして我が校教育の使命も亦此に在る。

本書の内容は叙上の精神を充すに足るもの、本村青少年諸子の讀み物として其の價値大なるを信じて疑はない。

不敏ながら育ての親の一員として本校職員諸君と共に之に参加し得ることは私の限りなき歡びであり光榮である。

昭和八年七月十六日

開校記念の佳日に當りて

比々多尋常高等小學校長

守 屋 良 平



目 録

第一課	比々多村	一
第二課	畔塗り	五
第三課	小田急	八
第四課	我が村の蠶業	十
第五課	鉢巻山記念林碑	十五
第六課	比々多村圖書館	二十
第七課	煙草	二十六
	一、赤葉かき	二十六
	二、納付の日	二十八
第八課	西野村長	二十九
第九課	比々多村の自然地理	三十四
第十課	俳句	三十九
第十一課	開校記念日に際して	四十五
第十二課	槻の木	五十
第十三課	病中の友へ	五十三

第十四課	多陵摩詣で	五十九
第十五課	思ひ起す行軍三日(中の日)	六十三
第十六課	我等の農村	六十六
第十七課	補習學校	七十
第十八課	石井吉右衛門氏	七十四
第十九課	忠魂碑	七十九
第二十課	祝詞	八十三
	一、	八十三
	二、	八十四
第二十一課	和歌	八十六
第二十二課	横山鶴松氏談	八十九
第二十三課	相模三之宮古墳群	九十九
第二十四課	成田伍長	百七
第二十五課	比々多村青年團辨論部の歌	百十二
第二十六課	實習	百十五

第廿七課	弔辭	百十八
	一、	百十八
	二、	百廿四
第廿八課	古代に於ける我が比々多村	百廿五
第廿九課	開取帳より	百卅五
第三十課	陸軍記念日講話	百卅七
第卅一課	耕地整理	百四十七
第卅二課	樂園の建設	百五十二
第卅三課	卒業生	百五十六
	一、十六歳の彼	百五十六
	二、堺より	百六十
	三、石の鳥居	百六十三

第一課 比々多村

比々多村は中郡の中央にあつて、西北に山を負ひ、其の連なる所靈峰阿夫利山に達する。東南は平野開けて遠く相模原から關東平野に連なり、一方相模灘に臨んでゐる。往古比田郷と唱へ、足柄峠を越えて關東に通ずる要路に當つてゐた。箕輪・串橋は其の驛趾である。徳川幕府の時代には矢倉澤往還（青山街道）の中樞に當つて、東海道の裏街道をなし重要な地であつた。善波峠には茶屋があつたし、中央神戸の各戸に家號のあることなどはそれを物語るものであらう。

村名比々多村は郷社比々多神社傳記に「當社鎮座の地を昔比々多郷と唱へし故此神號なり。」といふに基いたのである。

比々多神社は崇神天皇の勅願所であり、又附近に立派な古墳が澤山あり、石器時代の遺物の出るやうな事から上代文化の様が想像される。比々多神社が冠大明神と言はれ相模の國の總社であり、一時は國府が置かれたこともある。

明治維新の際、本村各大字は一旦葦山縣に屬したが、其の年十二月二十八日神奈川縣所轄となつた。明治四年七月十四日更に足柄縣に移り。同九年四月十八日復神奈川縣に編入され、各大小區に分屬した。明治十二年大小區を廢せられ大住淘綾郡役所管轄となり、戸長役場を設けて治められた。戸長役場は四つの組合に分れてゐた。明治十七年七月再び白根を除く外六箇村を聯合して一の戸長役場を神戸村に置いた。

明治二十二年四月一日町村制實施に當つて、前記六箇村に白根

を加へ七箇村を併合して一箇村を組織した。之が現在の比々多村であつて、前の村は各大字となつた。明治四十四年大字三之宮を三之宮・栗原・木津根の三區とし前記各大字を加へて行政區を九つに分けた。初代村長は飯塚清吉氏で、今の村長小林安五郎氏は第二十七代に當る。

明治四十四年西野村長の時報徳學訓導杉山寅吉氏と協力して、先聖二宮尊徳先生の遺法報徳主義を以て村是とし、全村に九箇の報徳結社を設立し、更に比々多村青年報徳會、比々多村報徳婦人會等を設けて、全村一人も報徳社員でない者はないやうになつた。報徳社は今に其の儘進んでゐる。現在の青年團や處女會は其の後幾多の變遷を経て今日に至つたものである。

教育は村立比々多尋常高等小學校の外、村立實業補習學校・青



年訓練所があつて何れも優良の成績を示してゐる。中學校・女學校・農業學校何れも通學に不便を感じない程度の所にあるので至極都合がよい。衛生大掃除は春秋二季に行はれ、下水や井戸も段々改良せられた。避病院は伊勢原町外五箇町村の組合に加入し、聯合病院を建てて傳染病に備へてある。風俗は頗る純朴で隣保團結の美風が強い。昭和五年徴兵検査の際に思想調査をされた結果、「最も堅實なり。」と文部省から折紙をつけられた程である。之は教育の當を得てゐることにもよるであらうが、又一面環境の力も與つてゐることを物語るのである。

顧みれば二千年の歴史を有する比々多村、大和民族東方發展の

要地としての比々多村、純農村として發達を遂げ來りし比々多村。時は往く、世は遷る。徒らに昔を語り今に安んじてはゐられまい。將來の我が村を擔ふ青年よ、處女よ、少年よ、少女よ。古くして新しく發展して止まざる我が比々多村の振興の爲に、修養せよ、熟慮せよ。さうして眞の努力を捧げて和衷共同、共存共榮の實を擧げなければならぬ。

### 第一課 畔塗り

運わるく僕は一番やりにくそうな場所に當つてしまつた。今までやつた事のない仕事、その上一番困難の場所なので、中々手が着かない。皆はべちやりく塗り始めたが、やはり僕と同じらしい。暫らく見てゐたが中々うまく行かない。鍬の先の土がねばつてとれない。足でこねては付けて居るが畔にはうまくつ

かない。中には鍬を置いて手でなすつて居る者もある。僕も始めた。やつと鍬に土をのせたが、どうして畔に付けようかご一苦心。おとしてはならないと、一生懸命につけて行く。側の者を見たら、ずるぶん變な恰好をしてゐる。だが、僕はそれよりも尙をかしいだらう。たつた二ノートルの畔ぬりが中々困難の仕事だ。ぐづぐづして居る間に時間は終へてしまふ。先生はだんぐと僕の方に来られる。他の者もうまく塗れないと見えて、「塊ミカりてつかない。」「うなつてしまつたから付かない。」などと理窟を言つて居る者もある。何時も技術が良いとほめられるだけあつて、やはり高橋君はうまい。小さいけれども中々要領がよい。暫く見て居た。もう塗り終へる者もある。僕のはまだ中々だ。まづい手付で塗り始めた。ひごくはねがとぶ、や

つてもぐどもうまく行かない、方々凸凹だ。自分ながら何だかをかしくてならない、思はずふきだした。どうしてこんな下手なのかと、つくつく考へた。何時來られたのか後で先生がにくくして居られた。先生が「一寸鍬を貸してみなさい。」とおつしやつた。矢張り先生は上手だ、第一鍬の使ひ方が軽い。ちよつと土を取つては軽く打付けられると、氣持よく土は鍬からはなれて畔につく、すかさず平に展ばされる。見て居ても實に氣持がよい。一寸の間に僕の擔當分を塗つてしまはれた。左右に比べると段がついてうまい。先生の塗られた處だけが目立つて見える。皆が勝手な批評をしながら田から上つた。僕も皆の後について農具舎の前に来た。

先生は上手だ。そして早い。それに僕は遅くて下手さ來たら級中一番だ。然しかうした下手も、一生懸命になつてやりさへすれば、きつと先生の様に上手に早くやる事が出来るのだらうと思つた。

## 第三課 小田急

「グオーツ、グオーツ。」と、我が比々多村の南の方を小田急行電車が西に東に通るのが響く。昭和二年四月一日に開通したのであるが、その當時は電車のきしる音さへすれば、野に働く人も家にある者も、等しく目も耳も奪はれて、一種言知れぬ感じを覚えながら、釘付けにされたやうに見送つたものであつた。朝となく夜となく始終見慣れた今日では、好奇の感は薄らいで來た。否むしろさうした感じは無くなつて來たが、その交通運

輸の利便を蒙ることは漸次多きを加へて來た。何處へ行くにも憶劫でなくなつた。東京へ行くにも、小田原箱根方面へ行くにも、亦關西地方に旅するにも、至極簡單になつた。平塚驛を迂廻した當時を回顧すると、時間の上からも亦經濟の上からも、非常な變遷をもたらしたものである。交通機關に恵まれてゐなかつた我が村は、之が爲に蘇生の思ひをした。まして此の沿線に於ても、より不便であつた地方は想像に余りありと言へよう。夫ればかりではなく、小田急開通後間もなく、郡の有志者及び縣園藝試験場長富樫氏等發起となり、小田急沿線の園藝蔬菜の栽培に着目し、大いに之が研究熱を高潮し且之が指導に力めた。我が村に於ては、従前より此の道に研究努力してゐた先覺者、此所に着眼した者とは打つて一丸となり、園藝蔬菜の栽培は頓

に普及し、其の生産額は急激に増加して來た。そして其の生産品は此の小田急を利用して東京方面は勿論、遠く關西方面にまでも、迅速に送荷し得るやうになつた。

我が村の園藝蔬菜の栽培は、年と共に重要性を加へつゝある。農業經營者は活眼を聞き時勢の推移に細心の注意を拂ひ、大いに研究努力し此の道の發展を圖ることが刻下の急務であらう。斯く考へるとき、小田急の開通は單に交通運輸上我々に寄與する所が少くないばかりでなく、産業の推移に影響する所も亦多大である。

#### 第四課 我が村の蠶業

蠶業が長足の發達を示したのは、外國との通商貿易が始つてからのことである。勿論我が國としては古くから行はれてゐたこ

こは歴史上明らかである。私の村などに自然生の桑が到る處にあつたのを見ると、土地が桑の生育に適し、蠶の飼育に適してゐることが知られる。今でも三浦郡などには天然の桑が澤山にあるし、また桑の不足した時に丹澤山の山桑が盛に切出された例もある。

我が村の蠶業は明治維新前後からのことである。坪之内の横山勘左工門さんの處では、維新數年前既に養蠶をせられたさうで、恐らく村で一番初であつたらう。家も蠶室に適するやうに造られてゐた。それからぼつ／＼飼れるやうになつた。飼育は自然のまま、蠶種も自分で採つたものであつた。繭買も八王子から年々來て、大きな紙の袋へ一ばい幾らと言ふやうに極めて大まかなものであつたやうだ。製絲は八王子で行はれた。桑園の

植付は明治二十二年が初で、餘程蠶業と言ふものに注意されて來た時である。齋藤さん、篠生さん、杉崎さんなど非常に熱心に研究する人が出來た。かうして明治二十七八年頃までは過ぎたが、之が第一期で準備時代とか基礎時代とも言ふのであらう。

明治二十七八年頃から蠶業界に大變革を來した。それは火力を用ひる温暖飼育法のはいつて來たことである。勿論外國貿易の發達と共に生絲の聲價が上り、随つてそれが日本の蠶業界に大なる影響を及し、其の餘波がまた我が村の蠶業を活氣立たしめたのである。信州や武州から養蚕教師が入込んで來る。柔苗の種類は改良される。蚕種製造の専門家も出來るなどして、かなり大規模の飼育が行はれるやうになつた。しかし此の時代は研

究時代と言はうか、練習時代と言はうか、失敗が多くて結局收支相償はない者が澤山あつて、生業としては成立たなかつたのである。しかしかうしてゐる間に各字の熱心家によつて倦まず研究は續けられてゐた。特に恐しい南陽氣や、解舒に大關係のある上簇後の處置などは随分苦しんだものである。解舒については製絲家も十分の研究がなく、今年の繭は絲の立ちが悪い位に考へてゐた。随つて製絲家にも失敗する者が多かつた。尙此の時代に水力で大規模の製絲工場が三之宮に設けられた。かうした過渡時代は明治の終頃迄續いた。

大正の頃から成功の域にはいつた。縣や郡でも種々の獎勵法を採られた。蠶種改良に對する施設、桑園新設に對する補助金、模範桑園の設置等である。模範桑園は白根に設けられた。我が

比々多村青年團も分會と合同して模範桑園を串橋に置いた。大正六年には串橋に稚蠶共同飼育の組合が出来た。白根・三之宮の組合も之と前後して出来た。かうしたところから失敗と言ふことは殆どなくなり、立派な生業として成立ち、村の産業の主要なるものとなつた。

近來飼育法に就いては火力を用ふる室内判桑育の外に、全葉育全芽育・條桑育・野外條桑育などと盛に研究されつゝある。將來の飼育法が如何なる所に落付くかは容易な問題ではない。養蠶家としては成るべく手數や雜費を省いて多量の生産をしなければならぬ。しかしそれが品質の方からの要求に適するかどうか。要するに蠶業の發達は蠶種製造業者と飼育者と製糸家と三者の誠意ある協力によるものである。

夏秋蠶は最近漸くよくなつて來た。初は全く結果が當にならぬものであつたが、今日では春蠶に對抗する立派なものになつて來た。之は飼育者の研究の進んだこと、蠶種の改良、貯藏法等の進んだ結果である。彼の風穴種など出て來てから稍理想的になつて來た。夏秋蠶専用の桑も出來た。夏秋蚕専用の桑は明治の終頃からで、坪之内の原伊三郎さん、白根の山本富八さん、串橋の杉崎忠次郎さんなどが其の先驅である。

#### 第五課 鉢卷山記念林碑

御所ヶ谷戸の西に凹形の小山がある。之を鉢卷山といふ。故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級西野松三郎氏の記念林である。一日杖を曳いて獨りこの山に登つた。赤松の林の中の委曲した道、一步步高くなるにつれて、北西

の方の栗原の部落の家々が次第々々に明らかになつてくる。東の方比々多神社の森、三之宮の家々、眼界の廣まるにつれてだん／＼はつきりする。赤松の林の中には處々櫻が交つてゐる。東側は樟の林で緑の梢が盛上つたやうに茂つてゐる。梅、栗などもある。西北側は檜、杉の林で眞黒に青んでゐる。頂上に登ると眠界は全く廣くなつた。特に東の方は何もさえざる物がない。伊勢原の町、大竹の森、相模川も一目に見える。落葉松、百日紅、伽羅、躑躅、檜葉等と取交へて植ゑてある中に一基の石碑がある。之が鉢卷山記念林碑である。

## 鉢卷山記念林碑

陸軍大將正三位勳一等功一級伯爵

乃木希典篆額

西野松三郎君は余の畏友たり。白露開戦するや、君上等兵を以て佐倉聯隊矢部中隊長の部下に屬し、明治三十七年三月十一日戎装して途に上る。期に先だつ一日、宴を家に張り余も亦預る。君至嚴に告げて曰く、兒生れて聖代に逢ひ、國氏の義務を盡くすは此の戦役に在り、然れども兵は凶器戦は危事、唯一死有るのみ。兒若し戦死せば埋葬虚禮を作す勿れ、法會豊饌を供ふる勿れ。兒嘗て至嚴の旨を承け、植林之業を興さんご欲し略々端緒に就けり。官若し祭典の料を賜はば慎重に貯藏し擧げて其の資に充てよ。比々多山は地温かに土肥え成功期す可し、微意此の如し請ふ諒せよご。一座善と稱す。至嚴之に諭して曰く、天王師を佑く王師必ず大捷を得ん。兒の凱旋の日を待つて漸次着手するも未だ晚しとせざるなり稱を勉めよと。既而君攻撃の部

署に着き、一戦して十三里屯の哨兵を走らし、再戦して南山の露軍を破り、三戦して鉢卷山の堅壘を攻めて之を領す。適々敵丸に中りて死す。訃音の到るや郷黨相集り、一は其の豪氣精忠名譽の戦死を遂げたるを喜び、一は宴席の別言終に永訣の讖語たりしに感ず。父治良亦病で死す。兄祐次郎家を嗣ぎ、銳意憤起、盡く賜金を舉げて歐米の嘉卉良木を購求し、中央の地を相して移して之を栽う。又本邦の良木を蒐集し、面陽の地には楠若しくは松を植ゑ、向陰の地には檜若しくは杉を植う。區域を正し道路を開き號して鉢卷山記念林と曰ふ。積年の事業是に於てか大成せり。夫、孝は百行の本。父母に孝なれば必ず君に忠に兄弟に友なり。君父母に事へては獨り奉養の厚きに止るに非ず、進んでは事業を助け退いては意旨を安んず。其の戦陣に臨

んでは、銳を挫き堅を斫り常に殊功を奏せり。忠孝兩全なりと謂ふ可し。而して忠孝の跡と植林の業とは、永く不朽に傳ふべきなり。君姓は西野名は松三郎治良の二男なり。兄を祐次郎と曰ふ。神奈川縣中郡比々多邨の人なり。祐次郎余に撰文を請へり。因つて概要を記し之に係くる銘を以てす。銘に曰く、

萬頃の山を開き蓬を交り來る。

方位地質兩ながら相宜し。

嘉卉良木皆所を得たり。

知る君が精神茲に存在するを。

十年の大計此れ從り始る。

知る君が身死すとも神は死せず。

満山養成す棟梁の材



長く國家の爲其の美を濟す。

明治四十三年七月十五日

大根小學校長小泉邨藏撰

從三位勳三等西岡諭明書

原漢文

(小泉邨藏氏、本村三之宮の人、本校同窓の先輩)

### 第六課 比々多村圖書館

今日は野上りだ。久し振りで學校へ行つて見よう。そうして圖書館へはいらう。春蚕から田植と長い忙しい日が續いた。不眠不休といふが全くそうだ。養蚕の上りの時などは、殆ど寝られなかつた。あの麥の上干物の日、夕立が來さうであつたので、さうく晝食を食べずにしまつた。田植は戰爭のやうであつた。

暗い中から準備して暗くなるまで、一寸の間も休めない。周圍からどんく植ゑられてしまふ。うかくしてゐると自分の田だけが眞中に残される。さうしたことは如何にも氣が利かない。やつぱり意地だ。何でも他人にまけまい。かうしたことも一昨日で終つた。

今日は野上りた。二日間は自分の自由だ。二箇月に亘つた戰鬥の終つた休暇だ。

晝食をすまして横山君と原君を誘つて學校に行つた。何時來ても學校はなつかしい。八年間育ててもらつた古巢だ。男生がテニスをしてゐる。女生がボール投にはしやいでゐる。自分も昔の子供にかへつたやうな氣がした。尤も昔などと言つてもまだ卒業して三年目だ。いつも元氣な先生。あの慈愛のこもつた眼。

温かい聲で「今日は野上りかね。」と言はれた。圖書館を開けてもらった。圖書館は本館職員室の南隣にある。大きなテーブルが三つあつて、一つには椅子が五六脚他の二つには腰掛が並べてある。右の壁には館則を書いた掲示板があり、別に黒板が一枚あつて自由に利用が出来た。其の上に二宮先生・大隈侯・木戸侯など偉人の肖像があつて、何事かを語らんとしてゐる。

左側の端にある書棚に添田文庫と記してある。之は添田良助氏の寄贈にかゝるものだ。大正十一年二月添田氏が、兒童の爲青年の爲何かよい讀物をと心配されて寄附されたものだ。當時はまだ村の圖書館はなかつた。随分兒童や青年に讀まれた。私も在校時代よく借りて讀んだ。

表紙のいたんだのや金文字のかすれて見えないものもある。是等は皆多くの働をした跡を物語るものだ。昭和三年九月十一日御大典記念として此の圖書館の出來た時、そのまゝ、圖書館に編入され、永遠に故人の篤志を語り、將來に人を導くのである。次の棚は兒童文庫である。之はアルス發行の日本兒童文庫と、文藝春秋社の小學生全集とが主となつてゐる。之は圖書館の出來た頃、文集や文庫が發行されたので、學校の先生方が相談されて、月々の小遣を節約して、生徒の爲に買つて下されたのだと聞いた。

青年文庫一般文庫と次々に並んでゐる。此の中には講談全集・修養全集・世界文學全集などがあり、尙、横井博士全集・日本時代史・日本文學叢書・相模風土記など貴重な書物が澤山にあ

る。その大部分が青年團員や有志者の寄附である。私は澤田謙氏著のムッソリーニ傳を借りて讀んだ。愛國的熱血兒其の溢れる精力は時には乱暴となり、冷酷とさへ評された。然し彼は小さき小鳥にさへ執着の愛があつた。一人の母を思ふ時、如何なる困難も忍び苦痛にも堪る殊勝さがあつた。母も亦父の檢束されたのも知らせず、病床にあつて二人の幼兒を抱へながら、明日の糧の金を彼の旅費に送つて、一意彼の成功を祈つてゐる。私の手はいつしか固く握りしめてあつた。頭の中は興奮から興奮へと移つて行く。眼からは自然と熱い涙が湧いて來た。……しばらくして巻を置いて我にかへつた時には、四五人の友が來てゐた。昭和三年は我々日本國民にとつて、最も有難く喜ばしき年であ

つた。それはいふまでもなく、今上天皇陛下が御大典の禮をお舉げになつた事であつた。此に於て上下舉つて此の御大禮を奉祝すると共に、何か永久に傳へる記念事業をこの企が起つた。本村では一方學校の復興計畫が完成された。講堂が出來た。特別教室が揃つた。更に此の圖書館が設立されたのである。嘗て御成婚記念に比々多小學校獎學基金の規定が出來て、以來毎月先生方が特別寄附をされて積立金が出來てゐた。有志者の寄附も二三あつた。此の金が圖書館設立の基本となつたのである。今私達が茲に修養とよき娛樂とをなすのは、其の設立の本旨に副ふものであらう。更に將來出來得る限り本圖書館の發展に貢獻しなければならぬ。

## 第七課 煙草

## 一、赤葉かき

梅雨あけの天氣が幾日も幾日も續いた。車馬の通る度にすなばこりが舞上り、草や木は雨をほしさうにあへいでゐる。

「きびしい暑さですなあ。」

愚痴とも喜ともつかない挨拶が毎日かはされる。今日も朝から太陽がきら／＼輝きだした。

「暑くなるよ。」

ご父が言つた。その言葉のうらには「此のお天氣のうちに煙草を片付けたい。」といふ意味がある。こゝで降られると、苗床の丹誠も、植付後の骨折も水の泡になるかもしれない。又風にでも吹かれると高い肥料代もなくなつてしまふ。暑いなごは言つて居られない。

父も母も煙草畠へ出かける、地上の長い影をふんで。俗に煙草畠へむぐると言ふが、中へはいるとわづかに青空がさくの彼方にのぞかれるだけだ。

むれた空氣、やにの強い香で息苦しい。氣持悪くねばりつく葉、ポツリ／＼とかゝれる音。話聲は次第にさくの彼方へとうつる。日はだん／＼高く上る。むされるやうに暑さが増す。やにのよく上つた葉は強ひ光をあび、あの不規則な凹凸のある面。

風一つ來ない。身體はにちやく／＼する。額から汗が流れる。もう話聲も聞えない。やにでみ／＼ずのはつたあごの様に光つてゐる手だけは機械のやうに動いてゐる。

じつと身體を休めると呼吸のせはしさが感じられる。ヂイと啼く蟬の聲に一層暑さが増す。小鳥が二三羽自分等と何の交渉も

ないやうに飛んで行く。

早くこの身體をぬぐつての木蔭の一体を思ひ、又かきはじめた。

## 二、納付の日

納付の日は嬉しいものだ。

ねむい目をこすり、蚊に喰はれながらのした煙草。久しぶりの雨にも休まずに葉選をした煙草。それがいよ／＼お金になるのだ。

今朝早く父は近所の人達と一所に専賣所へ行かれた。僕が學校から歸るとき、母は夕飯の仕度でいそがしさう。妹は門口で父の歸を待つてゐる。鳥が二三羽高取山の方へ飛んで行く。パツと電燈がついた。一家のものは爐端で話しながら父の歸をまつ。しばらくすると通の方から人聲が聞える。

「お世話さんでした。」

たしかに父の聲。姉は湯殿へ行く。弟はくゞりをあける。

「歸つたよ。」

皆が喜んで迎へる。妹は何よりさきに

「下駄買つて來て。」

と聞く。弟は大きな包をよち／＼と運び出す。

父は上り段ではだし足袋をぬぎながら、

「よかつたよ。あの本葉が四等にはいつた。」

と嬉しさうに言はれた。

父が湯から出られると、皆で楽しく夕飯の膳に向つた。

## 第八課 西野村長

西野村長、名は祐次郎、明治五年五月四日本村栗原に生まる。

明治三十五年四月選ばれて村長となり、同四十二年九月再び推されて村長となる。

自治體は眞の自治體ならざるべからず。之氏の抱持せる主義にして、又自ら任ずる所なり。徒に官に依頼し其の指導監督によりて事をなす如きは其の本意に非ざるなり。

強く明るく正しき政治を行はんが爲に修養會を組織せり。修養會は村長・助役・村會議員は勿論、役場吏員・學校職員・區長・其の他の名譽職員、神官・僧侶・駐在所巡査・各種團體長及び有志者を網羅したるものにして、毎月一回會合し、事大小なく協議し、一致協力村政の改善と良風美俗の馴致につとむ。

産業に於ては果樹蔬菜に意を注ぎ、中郡役所の技師佐藤頼光氏を聘し、講演に實地に指導大いにつとめ、自ら蜜柑・葡萄・梨

等を栽培して範を示し、推奨大いに力めしかば栗原・三之宮・坪之内・善波方面に於て、今日相當の産額を見るに至れり。蔬菜は胡瓜・茄子・其の他の野菜類を撰び、市場に就いても常に細心の注意を怠らざる等、其の先見實に敬服すべし。

教育第一。之氏の常に唱ふる所にして、又着々實行せし所なり。故に學校に對しては十分理解し、強く後援せしを以て、本村教育は隆々の勢を示せり。大正二年、神奈川縣知事より教授・訓練優良の故を以て普通教育獎勵旗を授與せられしも、氏當時の力與つて大なりと言ふも過言に非ざるべし。當時役場は借家なりしを以て現在の家を新築したりしが、學校に先んじて役場を新築せしは遺憾なりと度々語れり。以て如何に教育第一兒童尊重に誠意ありしかを知るべし。

風俗改良の爲め、先聖二宮尊徳の唱導せし報徳教を以て村是とし、村民悉く報徳社員となし、各區に報徳社を組織して全村に九つの報徳結社を作り、茲に經濟と道德とを結合し、忠實・勤勉・質實・剛健の風を馴致し、貯蓄の思想を養成せり。尙青年は比々多村青年報徳會とし、婦人は報徳婦人會とし、各々業に勵み修養につとむ。例會には村長自ら出張し、杉山報徳學訓導を力を戮せ、學校職員役場吏員等を出張せしめて、村政教育等に對する理解融合につとめしめたり。

比々多村の生命は鈴川にあり、鈴川の生命は大山に在り、比々多村の者は宜しく大山に植林すべし。是氏の持論なり。氏が大山町の所有地に植林せしは、その持論の實行に外ならざるなり。氏は青年の味方にして又青年教育者なり。休日夜間等青年を自

宅に集め、作業を共にし、劍道を指導し、訓諭説話をなし、或は辯論部体育部等の實行に種々の便宜を與ふる等最もつとめたり。

大正四年九月選ばれて郡會議員と爲り、尋いで議長となる。信望最も厚し。大正五年十月二十一日郡の囑託により東北地方視察團を率ひて福島縣に至り俄に病にかゝり、同月三十日夜東京帝國大學病院に於て長逝す。享年四十五歳。氏の逝去は我が村に取りて多大の損失なるのみならず、帝國に取りても國士の一人を失ひしなり。

氏は村長たる外、或は學務委員となり、或は村會議員となり、青年報徳會總理・至誠會長・佛教護國團長・大日本報徳社報徳學訓導等となれり。

私人としては飽迄人情に厚く、細心にして大膽眞に模範とすべき人なり。中郡長武田巖作氏撰の墓誌に、「君爲人温良敦厚而内藏剛健不屈之氣」とあり。眞に然りと云ふべし。

## 第九課 比々多村の自然地理

關東平野の西部には南北の方向を示す山地が連なつて、その縁を形成する。この山地を關東山脈と名付ける。關東山脈の南端をつくる山地を丹澤山塊と稱し、之を地質學的に言ふならば、第三紀時代の海中火山の噴出物が海底に堆積し、それが隆起して出來た山地である。丹澤山塊の内部には度々の地殻運動に依つて數多の弱線が形成され、恰も寄木細工を見る様な構造を示すに至つた。さうして各地塊は或は隆起し或は沈降して地表凸凹の原型をつくり、之を河水が浸蝕して小さな峯や小さな谷を

刻み、現在見る様な地形をこしらへたのである。伊勢原附近より煤ヶ谷を経て西北の方向に連なる谷は一つの弱線を示すのであつて、この線に沿つて七澤・別所温泉等を始として數個の鑛泉が列を爲して湧出する。尙その支脈は比々多村を斜斷して鶴卷附近に出るもので、鶴卷温泉はこの弱線に沿ひ地下の深所から上昇する水が、岩石中の種々なる鑛物成分を融かして地表に湧出するのである。善波川の谷は東西の方向を示す一つの弱線で、これに並行する大規模なる弱線は大山より丹澤山の南側を走り、之の線を界として丹澤山塊に屬する一地塊は著しい陥没作用をして秦野盆地の凹地を形成した。一方大山や丹澤山をかたちづくる地塊は隆起して現在の様な千五百米内外の山地を爲すのである。



この様な地塊山地に地震動が傳はれば各地塊は異なつた運動を示すに違ひない。大正十二年九月一日の關東大地震に際しては、丹澤山塊及びその附近は一塊づつ別々な運動を示したことが、正確な測量の結果明らかにせられた。その調査によつて見ると大山は九十五糎の沈降を示し、比々多村附近は七十七糎の隆起を示したのである。

地塊山地の斜面には川を生じ、河水は山地を浸蝕して谷をつくる。運搬する砂礫は山地の出口に堆積して扇狀の地形をつくり、河は洪水毎に流路を變じて砂礫上を網の目の様になつて流れ下る。

鈴川は大山の東斜面に發生して大なる谷を形成した。浸蝕して出來た砂礫は子易より下流に堆積して扇狀地をつくり、その上を或時は富岡の方へ流れ、或時は田中の方へ、又或時は白根の方へ流れて所謂比々多の耕地を形成したのである。併し今はその様な荒河ではなくて再びその堆積物を切つて深い谷を造りつゝ、三之宮から神戸に出る。栗原川も鈴川と畧々同様な歴史を経て現在は谷を切りつゝ串橋に至り鈴川に合流する。

この様にして河川が再び浸蝕作用を始めるに合はせて小さな支流も扇狀地を細く刻んで低い丘が出来る。三之宮の神社の台や、神戸の宿しゆくのあるところ、櫻坂・笠窪の宮の台等は即ちそれである。

台地の先端には泉が出来る。砂礫層中に滲透した河水が自然に湧出するのである。又見晴が良くて外敵の防禦には好位置である。原始人類はまづこの様な位置の森林中に住居を定めたであ

らうところは想像に難くない。所謂石器時代の遺物はこのような地点に散在する。今、鈴川や栗原川の造つた谷壁を見ると、最下部には所謂地山と稱する硬い岩石が露出して、その上に相當に厚い砂礫層が存在する。砂礫層の上には赤土と稱する火山砂礫層がある。これは比々多村のみならず關東地方に一樣に分布するもので、恐らく箱根や富士等の火山が激烈な噴火をして火山灰や火山砂・指頭大の火山礫を、關東平野一面に降らせた時代があつた事を物語るのである。赤土の上部は自然と黒い色をした腐植土となつて、これが地表まで構成してゐる。腐植土に混つて眞黒な砂利層が所々にあるが、これは寛永年間（昭和七年から二百二十五年以前）に富士

山の東南部が爆發して山体の一部をふき飛ばせた時に、西風に流されて相模地方一面に降積つたものである。腐植土は赤土の上に繁茂した草木の葉や幹が腐つて炭化し、それが赤土と混じつたもので、この層中に原始時代の住民の遺物が包含されてゐるのである。

（花井重次氏寄稿。氏は本村神戸の人。本校、神奈川縣師範學校、東京高等師範學校、東京帝國大學を卒へ、現に東京高等師範學校教授。）

第十課 俳句

縣廳の塔いよ／＼黄なり秋晴る、	笠窪	横溝流水
鶯の聲見ゆるかと思ひけり	白根	山本春霞
人心皆花になる花見かな	笠窪	横溝花月

麥蒔や明日の手繰を爐に語る  
 蚤の夜や茶に酔ひしとは氣もつかず  
 栗柿のあかるみきつた十三夜  
 七十七越えても嬉し今朝の春  
 折れるまで添ひけり菊の力竹(詠史 楠公)  
 秋晴の庭に舞ひ來る赤蜻蛉  
 樂々こ手足伸ばすや浮く蛙  
 静かさや雨も柳の色に降る  
 汗の鍬かたぶく家を起しけり  
 合ふ人の笑は高し年禮者  
 湯貫の下駄音高し冬の月  
 世の重荷下して菊の手入かな  
 串橋 永澤遊雲  
 坪之内 杉浦杉甫  
 串橋 宮崎龜久  
 笠窪 横溝其山  
 串橋 江原正風  
 栗原 北條山桃  
 栗原 石井靜賀  
 串橋 本杉松翁  
 串橋 佐藤長芳  
 笠窪 横溝一蛙  
 神戸 三武三保  
 笠窪 添田花好

如月やまだ降るものの定まらず  
 夕涼み橋長かれと思ひけり  
 富む里に朝寢の戸なし初乙鳥  
 まだ木香の抜けぬ座敷や風かをる  
 餅搗の湯氣を拭きたる眼鏡かな  
 人の見ぬ時に急ぐか春の水  
 節約の網をこぼるゝ松魚かな  
 副業の講習會や桃の里  
 秋の蟬鳴けく命ある限り  
 夕日さす山の紅葉の鮮かさ  
 つけ紐をとけばこぼるゝ土筆かな  
 萬國に誇る皇土や紀元節  
 白根 近藤壽柏  
 笠窪 中村桐花  
 善波 市川光遠  
 三之宮 小泉山水  
 坪之内 榎本玉水  
 善波 飯塚晴山  
 三之宮 星野芳月  
 善波 桐谷梅笑  
 白根 山本白羽  
 串橋 齋藤峰雲  
 善波 桐谷福山  
 善波 清水波月

拾ふ子の末頼母しき落穂かな  
 暮れかゝる花から出たり春の月  
 進む世や雲雀の上を人の飛ぶ  
 明方の温石の冷え覚えけり  
 朝寒や堆肥のいきれいちじるし  
 畑打や旦那の知らぬ飯の味  
 籠の虫草に戻して聞く夜かな  
 國舉げて祝ふや菊の大佳節  
 山吹や散れば流るゝ咲き所  
 腹ちかゝ見せつ小鮎の早瀬かな  
 種瓜の片黄ばみする残暑かな  
 警鐘に夜寒の夢を破りけり

善波 清水柳月  
 栗原 廣田梅香  
 善波 飯塚笑月  
 栗原 石井梅園  
 串橋 佐藤翠山  
 善波 佐藤湧水  
 坪之内 榎本柳雪  
 善波 石垣基山  
 栗原 振原美星  
 串橋 小林桂峯  
 三之宮 大貫ほまれ  
 串橋 宮崎松華

雨一人匂ふ新茶の薫りかな  
 儉約はよき手形なり年の關  
 花は尙名も亦ゆかし福壽草  
 寒に堪えて床しう梅の薫りけり  
 不景氣は何處の里ぞ稻の出來  
 若人をみそなはず日や天高し  
 競ひ勝つ馬や日頃の世話上手  
 人の道踏むは涼しき心かな  
 いかめしき獅子も長閑や神の庭  
 勇ましき竹刀の音や寒稽古  
 寝惜しみて又見る月の小窓かな  
 苦も樂も心一つや年の坂

三之宮 大木白葉  
 笠窪 近藤芦舟  
 三之宮 大貫正風  
 笠窪 添田梅枝  
 三之宮 長島高月  
 串橋 江原芳華  
 栗原 武井一聲  
 坪之内 小宮桂月  
 坪之内 榎本樂山  
 栗原 今井東洋  
 坪之内 原靜雨  
 栗原 保國花舟

聞いて來た一里の遠き暑さかな	坪之内	森樂友
生籬に野葡萄熟れて秋暮るゝ	串橋	杉田不折
蜘蛛の巢の白き田面や露深し	栗原	原遠山
勇み立つ門や朝日に菊薫る	坪之内	石垣宗山
青訓の發火演習や秋晴野	串橋	齊藤紫山
自然美はもぬけて高し雪の富士	三之宮	星野豊山
話から菊の根分を無心さる	坪之内	山本和泉
羽伸ばす鶴や御苑の下萌ゆる	坪之内	近藤青嵐
碁の連れも有りと新茶の使かな	坪之内	國島花山
蕎麥刈るや釣瓶落しの日を浴びて	串橋	持田耕人
大晦日門には春のすがた哉	三之宮	田中光星
金魚鉢に幼兒の瞳のいそがしき	坪之内	原松籟

成す事を成して涼しき心かな  
(比々多俳人名鑑より)  
 串橋 星野清月

第十一課 開校記念日に際して

今日は七月十六日で我が校の開校記念日であります。即ち明治二十五年七月十六日に比々多小學校が始つたのであります。明治五年に學制が發布になりまして、翌明治六年四月一日に坪之内村の福昌院を校舎に代用して、初めて小學校が開かれました。之を坪之内學校と言ひました。それまでは寺子屋と言ひまして、勉強するにはお寺へ行つて讀み・書き・算盤そろばんなどを習ひましたが、之は隨意であつて義務教育ではありませんでした。之等の者が皆學校に集つて正規の教育を受ける事になりました。先生は僧侶・藩士・漢學者等でありました。

明治十年五月に神戸村六百十七番地に組合立の學校が出来て、之を神戸學校と言ひました。二階建の立派なものであつて落成式には大展覽會が開かれました。其の後明治二十五年の二月七日に惜しいことに火災にあひ、焼けてしまひました。それから當分串橋の妙藏寺を假校舍として授業され、一方校舍建築の議を進められました。前の位置は道路に面してゐて面白くないといふので、今の木下の地に換へられたのであります。明治二十二年に町村制が布かれました結果、組合村は改めて比々多村となりましたので、學校の名稱も比々多小學校と更りました。之は明治二十五年四月二十八日でありました。尙同年八月二十三日に高等科が併置されることになりました。高等科には大山町、高部屋村から依託された生徒も收容しました。之は

明治三十七七八年頃まで續きました。

比々多小學校の新校舍は五教室でありましたが、二年程で早速一教室の増築を行ひました。明治三十年度片岡喜又氏の校長の時に四教室の大増築を行ひ、大運動會を行ひました。當時運動會は珍しいものであります。明治四十一年に校地の大擴張、校舍の大増築を行ひまして全く一變しました。村長は横溝莊吉氏、校長は今井正藏氏でありました。此の頃から毎年運動會と學藝會を行ふやうになりました。平塚農業學校の優勝旗を獲得したのは明治四十四年で、選手は栗原の今井玉吉君でありました。

大正二年二月十一日に神奈川縣知事から教授訓練優良の故を以て、普通教育獎勵旗を授與されました。村長は杉山寅吉氏で、

校長は今井正藏氏でありました。大正十二年九月一日の大震災によつて本校は大被害を受けたのであります。校地には地割を生じ、校舎の大部分は潰れました。僅かに南方の四教室だけが半潰で残りました。校長草山忠八氏は村長石井勝治氏と協力して鋭意復興につとめました。一方僅かに残つた半潰の校舎を直し、木の下や、古材で板圍をした中で授業を進めました。順次に復興して大正十四年には本館二階建も出来ました。そこで一方教育の内面に突進むため、校長渡邊福松氏は村當局と協議して特別研究会を起しました。讀方・綴方・算術・郷土等に亘つて今も尙研究を續けてゐます。毎年一回此の研究を縣下の有志に向つて發表してゐます。昭和三年には曠古の御大禮が行はれました。校長重田政三氏は

村長吉川佳五郎氏と協議して百方盡瘁され、茲に本校復興の完成となりました。即ち校地の大擴張・講堂・理科・手工・作法裁縫室等が出来まして現在のやうになつたのであります。尙同年には農業科に於て縣下の優秀となり、神奈川縣知事から賞状を授與されました。前年度に於て縣の佳良となり、郡の優秀となり、遂に縣の優秀となつた次第であります。省みれば最初の開校以來六十年、比々多小學校となつてから將に四十年時に多少の變異はあつたにしても、常に順調の歩みを續け、中郡北部の魁を以て任じ、縣下に向つても時に警鐘をうつてまづ進まんとする意氣を示して居ります。之は偏に村當局のよき理解と、校長はじめ職員の方々の不斷の努力によるものであります。本校生徒たる皆さんはよろしく自分の此の學校に

學ぶの幸福を想ひ、村に感謝し、學校に感謝し、以てよりよき自己を育てなければなりません。本日の開校記念日に當つて、本校沿革の大要を述べた次第であります。

## 第十二課 槻の木

この學舎の庭は大神がしづまりませる御苑の片隅をも併せたるものなり。其處に年ふりたる槻の木ありたり。大きき六抱に餘り、幹は蠱々として空に聳え、大枝細枝さし交して、流石に廣き神苑も限なく掩はれたり。里人この祠を木下明神と稱へまつりしてこそ理なれ。

されば春風そよ吹きて下萌數ふる頃、梅のかをりにあらざれば鶯こそ來鳴かねども、宿許されしはし鷹が朝日浴びつゝ羽つく

らふ風情など如何に雄々しかりし事ならむ。

あらがねの土をも鎔す夏の日も此の苑のみには射さず。涼しき風の常に通へるものから、氏子の誰彼寄集ひ、ねすべりては胸毛撫でつゝ、足なげ出しては臍毛むしりつゝよしなしこそなごのゝしりあふいとまには、煙草の火玉掌にころげてあつき顔もせて、ひねりてはすひ、喫ひてはころげ、老槌竹の短きふしの間も煙管はなさずのゝしりやまず遊び興じきとぞ。

かゝるまとひも何時しか秋風立ちて、山姫の織りなせる錦の衣は此の樹にも惠まれたれども、めづるも束の間にて野分枝をならせば、さながら獵夫に嚇されし群雀の如く槻の葉飛散る。中には賤が家の背戸に落ちて、翁にかきよせられ酒あたゝめんと焚かるゝ幸なきものゝあると思へば、又流に掉して赤壁ならぬ



鈴川の月を賞でつゝ下りしものも多からむ。冬さりては人影とだゆる時、鳩雀さては青ちなご枝より下りたちて、祠の供米ついばむは常の日の事なれども、今日は朝より北風寒く雲ひきく垂れて、午の頃には雪さへちらつきたれば、明日の飢をや恐れけむ、群りてあさりきそへる様またなくあはれなりけり。風ますく、強く粉雪横に飛びて日は次第に暮れぬ。夜すがらの吹雪今朝は名残りなく晴渡りて、輝く日影眩しごもまばゆし。祠掩へる大槻に、雪の白木綿掛け巻くも畏さそへし莊嚴は、あな尊しごやいはむか、神々しとや云はむか。さる程に干支幾十度のぐり遇ひて、代は明治の初となりぬ。干年の昔を語れる此の樹も、護るべき國の掟未だ備らざりければ、心なの人等のはからひにて、可惜伐倒され、今は只名のみ残れ

るこそいと、あはれなりければ

いまはこかけのなのみのこれる  
と腰折れにものして、槻の靈をば慰むるになむ。  
(山本富八氏寄稿、氏は木村白根の人、篤農家、歌道の造詣深し)

## 第十三課 病中の友へ

其の後の経過は如何かね。傷口が濃んだといふことでしたが。何といつても君は不幸だ。この長い暑中休暇中を唯獨り淋しく不自由に過す、これだけ考へても確かに君は不幸だ。大いに同情するよ。健在なそして自由な我々の生活をみせびらがすものではないが、君の所在なさを慰める意味で過日の丹澤登山の概況をお知らせする。

八月一日午前三時、我々高等科男生一行は意氣正に天を呑む勢で校庭出發、校長先生をはじめ元氣な四名の先生を加へて一行總べて四十名。受持の先生を先頭に、足袋脚絆の輕裝で一氣に善波峠を越え、東秦野村蓑毛の山にかゝつた。麓の寶蓮寺で朝食をすまず。もう辨當の大半を平けてしまつて、大事さうに残を背中に負ふ者もある。腹が減つては何とかやら、辨當と水のあるところが一番の強味だからね。寺を出てから問題の胸突八町、やうやく線の太くなつた太陽を背に畑中のとても険しい坂道を登るのだ。みんなゆで蛸みみたいな眞赤な顔、頭からぼつ／＼と湯氣を出しながら進む、始めの中こそ元氣に掛聲などしながら登つたが、だん／＼聲も出なくなる。汗に目がくらんで来る。

「よいさあ。こらさあ。」

流石先生は大元氣。みんな疲れて情けない顔してゐる頃になると、向ふの山まで響くやうな大きな聲ではげまして下さる。するさ皆の顔の筋肉が弛んで申合はせた様な高笑ひとなる。大分登りつめた所で、澤山な荷物を背負つた二人連れの人を追越した。丹澤の人達だらう。案外平氣な顔でぼつぼつ登る。我々は急に元氣百倍。何一つ持たないのに身体一つを持って餘すなご………………。そんなことを思つて夢中でよち登つた。やつとのことヤビツ峠に着く。まだ大山や丹澤の山々は一段上に聳え立つてゐる。谷底から吹上げる風は冷々と火熱つた頬に快い。切立つた崖に岩松が生えてゐたり、崖路の近所に大きな苺の眞赤なのがなつてゐたりした。みんな我勝になつて苺を取

つて食べた。併し一寸苦い様で存外うまくもなかつた。こゝから目指す丹澤の札掛まではずつと下り道。あんなに苦しんで登つて来た分を下るのが惜しいなどみんないつてゐた。校長先生までしきりに心配してゐられた。こんな下りては損ではないかね。矢張りみんな強さうなことをいつて居ても相當疲れてゐるな。自分は一人で苦笑した。然し實の所自分の足だつてさうに突張つてしまつて、坂を下りるのに一々考へながら膝を曲げる位だつたのさ。午前十時。札掛といふ部落に着く。谷あひの木蔭に點々として立つ部落、物珍らしげに我々を見に戸外に出てゐる姿。木蔭の岩間を流れる清らかな流。思ひ／＼に足を浸しては快哉を叫んだ。足袋につままれて、白くむれきつてゐる足を清らかに澄ん

だ流に浸した時の快よき。頭のでつぺんまで一氣にすうつとして来た。そのまゝ河原にひつくり返つて大空を仰いだ。帯の一寸廣い位にしか見えない空。深い山中を思はせるに恰好の場所だと思つた。お辨當に舌鼓をうつた。やがて學校を尋ねたり、材木の山のやうに積まれてある間を縫つて部落の模様を探つたり、或は川の一部をせいで珍しい魚を探ることに興がたりした。目にうつるもの皆珍しいので時の移るも忘れてしまつた。午後二時近くまで休んでから、また同一の道を歸路につく。谷間の冷風に吹かれて笑談いひながら上る。非常に愉快だつた。ヤビツ峠を通る頃になると丹澤名物だといふ霧の襲來を受けた。涼しい風がさあつと吹いて來ると、眞白いものがすうつと走つて來る。見る／＼先頭の者は霧の中へはいつてしまふ。やがて

まはりの二三の者しか見えないやうになつた。  
「わあつ。」

先の方で大きな聲で叫ぶ。帽子を見るに一面に水滴がついてゐる。着物がしつとりとして来る。目がかすんで来る。

「男性的な山だ。」

みんな異口同音に叫んだ。ほんごに雄大な氣分になつたのだつた。

「もつとく霧がやつて来ればよいな。一寸先も見えない位に。」  
みんなこんな強がりをつたりして大ききわぎ。こんな霧の中でほんごに思ふさま大きな聲を出したら、どんなに痛快だらう。  
こんなざりとめのないことを考へたりした。

「人間なんてえらそうにいつても、大自然の前に立たせるとほ

んとに小さな存在だ。」

こんなことをつくく思つてみた。

かくて我々一行は無事午後五時頃歸宅、足にはまめが一ばい出来てゐた。何といつても君の行かれなかつたことは残念だつた。まあ讀んで呉れ給へ。御自愛の程を祈る。

#### 第十四課 多摩陵詣で

學校を出たのが午前七時であつた。伊勢原驛を七時五十三分の電車に乗つて新原町田に向つた。伊勢原驛は大山阿夫利神社參拜下車驛として有名である。相模厚木は鮎漁で知られ、海老名國分には國分寺の遺跡がある。相模原を行く電車は小高い丘や森や林の間を勢よく進んでゐる。桑と陸稻と甘藷の畑が何處までも續く。

原町田から浅川行の切符を買つて、横濱線に乗換へて八王子に向ふ。橋本驛の前に縣立農蠶學校がある。焼けつく様な炎天の下に生徒が熱心に實習をしてゐる。やがて八王子驛に着く。此の地は織物の一中心地である。茲で又浅川行に乗換へる。東浅川驛は御大葬の際特設された驛で、其の後 兩陛下 皇太后陛下 皇族の方々の御参拜驛になつてゐる。汽車は浅川驛に着いた。驛を出ると参拜道路になる。参拜道路は浅川驛の前から八王子追分まで續いてゐる。巾二十余メートル、人道と車道とに別れ、車道の中央には電車が通つてゐる。車道と人道の間には銀杏が兩側に植ゑてある。極東特有の樹木の立派な並木が年と共に茂り行く様が想はれる。御陵行の自動車は引切りなしに往復してゐる。

東浅川驛の前から左に折れる。兩側は樺の並木で太く揃つたのが勢よく伸びてゐる。僅かに進んで南浅川橋を渡る。清き水、白く美しき砂石、伊勢の神路山の五十鈴川がしのばれる。橋を渡つて進む。右側に繪葉書や記念の土産物を賣る店が並んでゐる。其の續きには圓形をした小山が順に並んで松や杉などが自然の儘に生茂つて、處々に楓がある。左側は小高い丘續きで種々の木が茂つてゐる。秋の風致も想はれる。正門を入ると受附がある。續いて皇族御休憩所がある。右は御神泉で清き水、うるはしき石、花卉珍木、端麗清楚にして幽雅しばらく拜觀して進む。是から兩側は杉の並木になる。高さ七八メートルぐらゐるのが全部揃つて勢よく伸びてゐる。其の外には松・杉・檜等の樹木が植ゑてある。

正面大鳥居の右には宮内省の告示板がある。左に手洗水が清く溢れてゐる。御陵は自然石の大きなので、一段二段三段と築き上げてある。其の最上の段の上に磨かれた玉石を以て圓形に造られてある。此の御中こそ大正天皇の御靈の御在す處である。鳥居の前に跪座して嚴かに拜禮す。

想へば大正天皇には明治天皇創業の後を承けさせ給ふて専ら紹述につとめさせ給ひ。内政治に御心をなやまし給ひ、外歐洲大戦に参加して帝國の國威を輝かし給ふあり。大正十二年の關東大震災には百僚有司に命じて救護に復興に叡慮を惱まし給ひ、多額の御内帑金を下賜せられ、更に詔書を渙發し給うて國民精神の歸趨を明らかにし給ふなど。御即位以來寸刻の御暇もあらせられず、常に國家と國民の上を御軫念あらせられたのである。

今や神去りまし、と雖も英靈とこしえに茲に止まり給ひて御國を護り給ふのである。

肅として歸り、御陵前の別れ路にてふりかへりて仰ぎ見れば、丘又丘・山又山と續きて愈々深く愈々高く遂に及ぶべからず。右は武藏野の原遠く開きて盡くる所なく、左には高尾の靈峯近く聳ゆ。東京御遷都の後東國に御陵を定め給ふに此の地を相し給ひし所以を考へて、深き感慨を禁ずることが出来ない。

かくて淺川驛から再び鐵路に身を乗せて伊勢原驛に下車し徒歩學校に歸れば、夕陽將に善波山に没せんとして、嚴かな光を送つて一同の顔を照した。

### 第十五課 思ひ起す行軍三日(中の日)

二十三日晴。

今日は道一層悪しきに患者もいや増しにければ、支那馬車十五輛を雇ひ、例の通り我は看護長・計手等と貳等患者を衛りて隊の後へに就き、時打見計らひ、憇ひては進み、患者を勵ましては共に歩む。本隊とはいたく後れたゆ。同じ道行く第六師團の補充兵一箇大隊ばかりあり。軍醫居らざるに病めるものあり。薬與へて共に鐵道に沿うて行くに、只廣き荒野原のみにて人家なく。木かけだに無ければ暑さいと烈しかりき。されば腸加答兒患者も多く、列外に出でて下痢しばしに堪え兼ねて後る者あまた。脚氣などの輕症者は先に行かため、我は是等を待ちつゝ進みぬ。夏の日の永きも早や暮れんとするに後れたるもの來らず。待てども來らず。折しも十二日の月は昇りぬ。一直線なる鐵道線路

を通して、人の氣やあると耳敲つるも甲斐なし。いらだちて看護長に迎はしめ、約一時間程經て漸く來りぬれど、責むるも得出來ず。

一里歩みて本隊に鞍山站にて合せしは午後九時ならん。宿舍未だ定まらず。停車場より一里隔りたる民家になさんご掛員忙しく探せども、其の方角さへも慥ならず。廣き野原に道さまよひ、呼笛など鳴らして先頭と後方と連絡を取り、或は道なき高梁畑を横ぎり、壕を飛越え、三四の家あるを得たれど、門は鎖されたれば扉を壊して入りぬ。家は戸・床なきは言はずもがな、却つて馬糞・人糞などのあり。清めてアンペラ敷き足を延べたるに、今日の疲れ甚だしかりけん、睡氣頻りに催されたり。さばれまだ晩飯を食せず。兵站司令部よりは給せられず。背に

腹は換へられず。炊事打据る薪集めて炊始め、三時間程にて温き汁と飯とを得たり。美味言ふべからず。爲に炊事の兵ども一睡もせて働きしは賞すべし。午前二時眠に就く。

(坂間祥太郎氏寄稿、氏は本村神戸の人、本校校醫、白露の役二等軍醫として従軍、本文は遼陽に行軍中の一節なり。)

### 第十六課 我等の農村

靈峰雨降の山、それより流れ出づる鈴川、綠濃き高取山・善波山を水源に栗原川・善波川、此の三川の恵に浴し、肥沃の土地に生まれ、平和の村に生立ち、和衷協同業に勤しむ村人三千四百人。祖先から賜はりし大地の寶、宅地は五千百二十三アール、水田は二萬二千九百六十八アール、畑三萬九千九百六十六アール、山林原野は四萬四千五百五十四アール、此の土の香に親しみて理想の

村を建設するのは我等の使命である。

戸数は五百四十戸で一戸平均の所有状態は宅地九、四九アール、田四十二アール、畑五十六アール、山林原野は八十二アールである。

農家は四百五十戸で總戸数の八割を越えてゐる。今昭和三年度の生産状態を尋ねるに、金額の最も大なるものは養蠶で、其の收量春蠶は三萬四千六百四十四疋、夏秋蠶は二萬八千九十疋である。養蠶をする家は二百七・八十戸であるから、一戸平均春蠶百二十四疋、夏秋蠶は百一疋、内外となる。米は米である。米は一萬二千七百俵位を平年作とするから、九十二万三千六百三十六リットル。中八千二百五十俵は飯米として消費する。耕作地は一戸平均五十八アールである。これに次



ぐものは煙草である。その耕作戸数は二百五十戸で、反別は三千八百六十一アール、收量は八千三百六十三キログラム、賠償金額は六七万円。耕作者の奮勵努力により十万円に達成せしめようと研究に研究を重ねてゐる。大麥は八千九百アールで四百七十俵、小麥は九千アール三千百俵で、これ等は産額の大なるものである。蔬菜園藝の中蜜柑は主に日露戦役記念として栽植せられ、目下一千アール位あつて、出荷組合を組織し、共同荷造をし京濱地方に出荷してゐる。蔬菜は早熟栽培をなし、京濱市場に聲價を擧げてゐる。胡瓜トマトが主なるもので、一寸蚕豆・抑制蔬菜・夏胡瓜トマト等で、生産物は悉く共同荷造をして、自動車の便によつて直接東京及び横濱の市場に送り何れも相當の成果を收めてゐる。

生産状態は以上のやうであるが、十年以前には普通農業即ち米・麥・養蠶・煙草等の耕種で農家の經營は十分であつたが、時代の推移經濟界の變化は茲に新しい農村問題を生み、やがては一家經濟に波紋を及し、生活難を告ぐるに至つた。之が又延いて自治体に影響し、その發展を妨げることになる。茲に於てか農村經營の改善は誠に焦眉の急となつた。

其の第一は精神的方面で農民道を確立すること、次は確立せる計畫のもとに農業經營をなす事で、多角形主義即ち種々なる作物を作り、努力の分配をよくし生産費を輕減することなども大いに考慮すべきことである。又生活の改善即ち消費節約、自給自足の經濟、農業日誌の記入、生産物の共同販賣、必需品の共同購入等何れも必要な事である。斯く改善を要するものが頗る

多い。これ等の諸点に留意し、共存共榮の本義に徹し、以て相互の福利を増進し、我が農村の發展を計らなければならぬ。

第十七課 補習學校

我が國の義務教育は大體に於て普及し發達し、理解も十分されて理想の域に近づいて來た。義務教育を修了し或は高等小學校を終つた者をどうするかといふ問題が刻下の急務である。十五六歳から丁年までは最もよい修養の時代である。特に文明の進歩は日一日と急速になつて來た。従つて義務教育を終つたからといつてそれで満足は出來ない。之は世界の趨勢である。我國でも當局は勿論、いやしくも帝國將來に考を及す者は常に思を茲に致すのである。

比々多村立實業補習學校の設立されたのは明治三十九年であつ

て、恐らく此の地方に於ての最初のものであつたらう。當時靜岡縣庵原郡杉山村に此の種の學校があつて極めて好成绩を示してゐたので、時の内務大臣から推奨されて實業補習學校と命名されたとの事であつた。

日露戦争は我が國にとつては空前の大難で、眞に國を賭しての大事であつた。然るに我が軍は陸に海に敵を破り、彼の暴露をして全く施す策なきに至らしめた。御稜威の光は世界の隅々まで輝き渡つた。此の時比々多小學校訓導飯塚卯吉氏主唱の下に學校と村當局一體となつて設立されたのが、我が比々多村立實業補習學校であつた。

勿論其の以前にも青年の夜學校はあつた。各字の若い衆は、お寺やお堂に集つて僧侶や學校の先生を頼んで、漢文の素讀をし

たり、算盤の稽古をしたりしたが、全く自由で好きな者が集る程度のものであつた、村立の補習學校が出来て、茲に學校としての組織の下に各教科に亘る教育が施される事になつた。然し前からの習慣があるので全部本校に集ることは出来ず、白根・栗原・三之宮・善波・串橋などに分校が置かれた。之は數年間續いたが、順次に本校に集るやうになつた。其の後中央地方の當局から獎勵があり、各自の自覺も伴つて補習學校は至る處に設けられた。明治四十三年から本校は特別優秀の成績をもつて、縣から補助金を交付されることになつた。劍道寒稽古の始つたのも此の頃である。劍道寒稽古は爾來二十餘年之を繼續してゐる。時には全中郡を相手に大磯の千疊敷で大試合を行つた事もあつた。寒稽古に就ては開始以來十年皆勤

の指導者杉崎精太郎氏の功を忘れてはならない。其の後本校は大體順調の發達を遂げて今日に及んでゐる。特に出席獎勵に就いては村青年團は一致協力して、之が任に當り全く義務制の形になつてゐる。此の意味に於て世界の先驅をなしてゐると言つても過言ではない。昭和元年度から出席獎勵旗さへ作られ、百パーセントの出席率を示す字さへ毎年ある。個人出席は皆勤者が毎年過半数に及んでゐる。學業の方面に於ても年と共に向上しつゝある。女子部もなかくよい成績を示してゐる。吾人は我が校を思ふ時、常に理解ある村當局、寒夜の休養時を奉仕される教職員、青年團幹部の方々に感謝しなければならぬ。村當局の理解、之が我が校の施設をよりよくするのである。教

職員の奉仕的努力、之が本校の生命であり動脈を流るゝ血である。更に青年團幹部は之が後援者である。此の三者の融合一致の中に育つ青年。彼等は感激に溢れた純情の魂を持つてゐる。自己を育てん爲には寒夜の雨も・雪も膚切る風をも意としないのである。如何なる困難の問題をも解決しなければ止まない努力と忍耐とを持つてゐる。かくして育つ青年の力處女の力、それが我が比々多村の力である。日本帝國の生命である。

## 第十八課 石井吉右衛門氏

「あんな偉い人はめつたにない。」かう今尙村の父老達から稱讚の言葉を聞く。それは石井吉右衛門氏のことである。氏の話をして聞く。それは戸長に推され、又村長に選ばれた。當時此の方

面には珍しい知者であり識者であつた。然し氏の理想は自己の力を十分に發揮して模範的理事者となり、優良なる治績を擧げるこいふやうな一時的な小さな考ではなかつた。未來永遠に亘りて平和なる理想郷を顯現するにあつた。

永遠に亘りて平和なる理想郷、之誰しも望む所である。而も望んで達し得ない。「道は近きにあり之を遠きに求む。」之を達するには組織せる自治體各員の理解せる融和にある。徹底せる理解は體驗によつてのみ生まれる。氏の理想としては全員をして悉く理事者たる體驗を得しむるにあつたが。之は望んで得べからざることであるから、出來得る限り村内有力者をして之が體驗を得しめることにあつた。「齊の治るは管仲の力にあらずして飽叔なり。」と、一二理事者の力により忽ちにして模範村を出現し、

亦忽ちにして其の影を没するが如きは、氏の甚だ快しとせざる所である。時に或は禍根を將來に残す場合もある。我が村、田に偏する所あり、畑に傾く所あり、或は山を貢ふあり、川に臨むあり、利害甚だ相反してゐる。しかも今日迄、地方的の争もなく、政治的にも階級的にも未だ曾つて争議と云ふものがない、之は實に氏當時の大方針がよく村人に徹底して茲に至つたのであらう。

私は特に氏の生活信条とも言ふべきもの二三を録して、私人としての人格に接したいと思ふ。

働く時は働き遊ぶ時は遊ぶ。といふことが氏の生活信条の一つであつた。凡そ人は四六時中働き通すことは出来ない。よし出来てもそれは單に動いたといふのに過ぎないのである。遊ぶ時

と働く時とくぎりをつけて共にその事に徹底してこそ能率はあがるものだ。此の意味に於て働く時は働き遊ぶ時は遊ぶといふことは生活のこつとも言ふべきことだ。氏はこれを自己の生活信条とされたのである。

これは氏の若い頃の話である。常に朝づくり其の日の仕事の三分の一をされた。自分が畑へ行くと火が出ると笑つて語られたさうであるが、他人が曉の夢を見てゐる頃氏は夢中で働いて居られた、又仕事にかゝつたが最後決して十時休や晝休をされなかつた。仕事ぶりは文字通り夢中であつた。そのかはり夕方は五時頃仕事をしまはれた。そして湯にはいつて好きな本など読んで居られたとのことである。話は別になるが、よく十時間働くとか十二時間労働するとかいふものの、働く量の方面から

見る時は一考すべき点がある。氏の如く働くなら或はもう少し精神文化の方面に費す時間を見出すことが難くはあるまい。安逸と虚榮、これは氏が排された生活信条の一つである。常に「嫁や婿に行くのには最もむづかしい家をえらべ。」「婚禮の衣裳はたんすのこやしである。」と子女に語られた。これは眞に味ふべき言葉だ。そして痛い處をさゝれる感じがする。又緊張と努力を生活信条とされた。或る年里の家が全焼した。かけつけられた氏は家人に「まあこれでよかつた。」と言はれた。それはおそらく心さへ緊張して居るなら家は焼けたぐらゐでつぶれはせぬ。むしろこんな事があるとゆるみ勝ちな心も引締るものだ。悲しんでも仕方がないといふ考から出た言葉であらう。眞劔味ある生活これ等の心得べきことである。

氏の生活信条については此の外にもいろいろあるが、次の話も又氏の面目をうかがふことが出来よう。それは非常に祖先を崇敬されたことである。毎年必ず彼岸と盆には里の墓をきれいに掃除してお参りをなされた。又なくなられた方の命日をよく知つて居られた。ある年里へ行つて「誰々の四十九回忌をしないのか。」と言はれたこのことである。我々は時代の尖端を行くのみが能ではない。かうした人の話を聞き、其の行を見て之を範とし、自ら戒むべきである。

## 第十九課 忠魂碑

鬱蒼と生茂つてゐる比々多神社の杜を背に道一重を界さして忠魂碑が建つてゐる。南は遠く開けて中郡の耕地を一目に眺め、眺めの先、遙に相模灘の白波の陽光に輝くのを見る。

中央に大きく「忠勇貽範」の碑がある。之に陸軍少將沖原光孚題としてある。右側には三基の凱旋記念碑がある。一は明治二十七八年戦役の勇士十三名、他の二には明治三十七八年戦役の烈士九十一名が記されてある。それらの名を見、之を其の人毎に考へて見ると、我々の周囲には感謝し尊敬すべき人が澤山にある。時は移つて我々は之等の盡忠報國の士を知らずに過ぎることもある。

左の殉難と記した碑には明治十年の役と、明治二十七八年の役とに戦死された三名の名が記してあり、他の忠魂碑といふのに明治三十七八年戦役に戦死された十五名の名が記してある。此の方々は皆國家の興亡を一身に擔うて遠く夷狄の國に渡り、天人共に許さぬ暴逆の徒を取りひしぎ、遂に身は戦場の露と消え

られたのである。我々は此の人々の功を永遠に忘れざるは勿論、此の義士の家族に對しても常に深き敬意を表さなければならぬ。抑々日清、日露の兩役は元寇以來の國難であつて、我が國の盛衰興亡の分れる所であつた。申すも畏けれども明治天皇は御身を以つて國難に當らせ給ひ、國民亦よく其の御旨を體して上下一致よく此の大難を打破つたのである。特に國民の代表として戦地に赴いた者は目に餘る大敵、彈丸雨下の中、酷しき寒熱、加ふるに野に臥し山に寝ね、時には梅干一つの給與さへ足らざる中を、全く身を忘れ家を忘れて、忠君愛國、正義人道の爲に天に代つて盡くされたのである。此の戦により東洋の日本は世界の日本となり、更に五大國となり、今や三大國の一つとして、我等は生まれながらにして東洋の王者を以つて世界に臨む光榮と

幸福とを享有してゐる。此の時靜かに思を當時にはせ、更に治外法權、關稅の片務協定時代に及ぶとき無限の感慨を禁ずる能はざることともに、皇國の礎を築きたる人々に對して深き感謝の湧き起らざるを得ないのである。特に此の役に身を挺して國難に赴かれたる士に對しては、一層の敬意と報恩の念をを抱かなければならぬ。

比々多村忠魂碑は明治三十九年二月比々多村報國會の建設されたもので、村民一致石を運び木を植ゑ、此の由緒深き景勝の地に、誠意のこもれる力を加へ、茲に忠烈の士の名を永遠に録することともに、殉難者の靈を安んぜんとするものである。

日の本の花や散るさへ勇ましき。

第二十課 祝詞

今上陛下 御即位ノ大典ヲ舉ケサセ給フ佳節ヲトシ高齡者天杯傳達式ヲ行ハセラル

聖恩彊リ無ク 聖德窮リ無シ

伏シテ惟ミルニ敬神念祖ハ其ノ源ヲ敬老ニ發シ忠孝ノ道亦之ニ芽サス惻隱ノ心ハ仁ノ初ニシテ敬老ハ忠孝ノ端ナリ然リ而シテ忠孝一途ハ萬世一系金甌無缺ノ我カ大日本帝國ノ精華ニシテ國體ノ宇内ニ冠絶スル所以ナリ

恭シク惟ミルニ

聖上陛下 至孝至仁親シク範ヲ垂レサセ給フ 我等蒼生皇祖無窮聖壽萬歲ヲ祈リ誠恐誠惶内ニ省ミテ聖旨ニ膺ヘ奉ランコトヲ期ス



昭和三年十月十日

陸軍二等軍醫從七位勳六等 坂間祥太郎

二

時維レ昭和四年四月一日縣下中郡比々多村白根標高四十六米突  
 ノ聖地ニ御鎮座在マス白木綿懸卷クモ畏キ神明神社ノ廣前ニ虔  
 テ白須 伏シテ惟レハ大震災以來既ニ七星霜亡己ノ年ハ當神社  
 ノ古例ニ由リ恰モ二十一年祭ニ當ルヲ以テ五十有餘戸ノ氏子各  
 自應分ノ淨財ヲ捧ケテ拜殿新築ノ議ヲ決シ執行委員八名ヲ選ミ  
 工ヲ高部屋村長塚金吾氏ニ委ス  
 起工以來氏子舉ツテノ努力ト諸職ノ勤勉トニ依リ頗ル短時日間  
 ニ工成リ五色ノ幣ハ神風ニ閃キ目出度上棟祭ヲ行フニ臻リシハ  
 神靈ノ御加護ト共ニ偏ニ委員諸彦ノ誠意盡力ノ賜ト敬シ虔テ感

謝ノ意ヲ表ス

然シテ廣前ノ大杉ハ直立天ニ貫キ千古莊嚴ノ美ヲ保持シ社頭ノ  
 老杉春ハ霞ノ海ニ浮ヒ軟風ニ琴ヲ彈奏シテ宛然舞鶴ヲ偲ハシメ  
 夏ハ三伏ノ炎熱ヲ遮リテ青田ノ清風ニ富ム穉ハ明月ヲ迎ヘテ雅  
 人享樂ノ仙境ト呼ハレ冬ハ木枯ト戰ヒ降雪ヲ翳シテ豊年ノ貢ヲ  
 呈ス而シテ函嶺ノ山姫ハ雙子ヲ抱キテ遙カニ社頭ヲ望ミ小綾淘  
 ノ海ハ水天鬚鬚ノ間ニ遠ク白帆ヲ散見ス惜シムラクハ我ニ韓柳  
 歐蘇ノ筆ナクシテ社頭莊嚴ノ美ヲ陳フルコト能ハサルヲ耻ツ  
 冀希クハ神靈御降臨氏子全般ノ誠意ヲ御嘉納アラセ給ヒテ此ノ  
 神杉ノ如ク歲月ト共ニ益々旺ナル事ヲ聊カ蕪辭ヲ呈シテ式辭ニ  
 換フ終リニ拜殿建築ノ資ヲ獻セラレシ篤志家ノ各御厚意ヲ謝ス

(氏子 近藤喜一)

第二十一課 和歌

生きんとする力限りか細々と

栗原 北條秀三

あを芽吹きをり薪束のまゝ哉

姉妹を持たぬ寂さか叔父われに

同人

まゝ事せよごさかぬ姪かも

硫安の値上げ協定の新聞記事に

栗原 石井久吉

こゝろの尖る百姓我は

ぬく灰に甘藷をいけて母上は

同人

夜學の弟待ち給ひけり

栗ゆたるまでご語りつ母上の

串橋 佐藤三郎

かた叩きする妹のいとしも

霜解の畑かはくまで日當りの

同人

よき軒端にて繩をひにけり

庭も狹に惱み伏したるコスモスの

坪之内 原 三郎

和日の下に花咲きにけり

庭隈に轉變ひ果てし紫陽花の

同人

はなぶさの上に濺ぐ秋雨

蕎麥の實は刈るべくうれぬ晝ながら

三之宮 小泉穂村

土の面に鳴きゐるこほろぎ

ひるの日に兒が遊びけむ文机に

同人

しをれてのれるたんぼの花

眼さむれば玻璃戸にうつる青葉かけ

三之宮 齋藤秋圃

まなこに泌みて明來るなり

萱の穂のまだいさけなし夕光の

同人

明るき山の岨路しほみちをくだる

白根 高山晴吉

花愛でし木々にしげれるみどり葉に

同人

今朝美しく光る白露

笠窪 横溝今次郎

大雨に漲る川を流れ行く

同人

家が人もすくふ術なき

白根 近藤喜一

鶴が岡石のきざはし濡らしけり

同人

銀杏の若葉露のあまりて

白根 近藤喜一

こしかけに火桶そなへて朝なく

白根 近藤喜一

人まつ梅の園ぞゆかしき

白根 近藤喜一

菖蒲湯のかをりを髪にすき込みて

白根 近藤喜一

かへし袷あはせにひざりほゝゑむ

白根 近藤喜一

培ひて又來む春ぞまたれける

白根 近藤喜一

み國を富ます桑の枯野は

白根 山本富八

佐保姫が青に黄色に糸遊を

白根 山本富八

そめて織りなす菜畑麥畑

白根 山本富八

大根干す野守の小屋の見ゆるかな

白根 山本富八

枯れし尾花の風になびきて

白根 山本富八

第二十二課 横山鶴松氏談

私は日清戦争には下士で出征した。日露には後備で歩兵第三聯隊に入營し、間もなく少尉に任官したのはよかつたが、聯隊の被服委員を命ぜられ、晝夜間斷なく洋服屋や素人の裁縫女まで雇つて季節に間に合ふやうに被服の調製追送の事務をとり閉口して居つた。

其の頃旅順の攻撃は悪戦苦闘を重ね其の都度全滅した隊さへあ

つて、之が補充として陸續出發する者あり、然るに私へは何等の沙汰もなく、此の分では到底旅順の撃鬪には出して貰へないと思ひ、聯隊長牛島大佐に度々出征を出願したが、時機來らずとして許されない、或夜自宅へ行つて無理に御願し、幸に補充出征を許される事になつた。此の時の喜は特別であつた。もう被服委員も免せざれ、暢氣で出發命令を待つて居るこ「今度の輸送指揮官は第一聯隊の横山中尉であるから、貴官は打合はせの爲出張せよ。」この内命を受け、第一聯隊に行き遭つて見ると、此の中尉は甥の榮治であつた。彼は極めて眞面目で曰く、「横山少尉は輸送中余の副官に命ず。」と申し付けた。其の後で篤と相談の上叔父甥を秘する事軍紀を守り良く命令に服する事などを約した。此の輸送指揮下に屬する者將校以下六百八十名。

愈々九月二日午後十二時四十一分品川發で多數見送の萬歳聲裡に發車した。私の親戚知友等がホームで甥から「横山少尉」ご怒鳴られて奔走する私の様を見て、實に滑稽なつたご後で話した。さもあるべき事と思ふ。九月四日廣島着旅館では叔父ごして優遇され、私も大いに張つた。遂に旅館の主人にも叔父甥が知れて大喜で優待して呉れた。九月七日町民の盛大なる見送を受け、廣嶋出發宇品港より乗船、連日逆巻く努濤の中に飲めよ歌へよと船中愉快に夢の如く、十日午後八時清國ダルニー港に上陸した。甥の中尉は野戰の第一聯隊へ私は後備の第一聯隊へ、右と左へ別れるので、此の一刹那再び互に顔を見合はす事は出來ないかと思へば胸一ばいとなり無言の儘であつた。

それから間もない九月二十一・二十二の兩日、私は旅順の彼の有名な二百三高地に第八中隊長として百四名を率ゐて苦戦奮闘したが、筆紙に盡くし難い慘狀で隊は殆ど全滅し、私も負傷して残員僅か九名を率ゐて辛うじて退却した。甥の中尉はあの際隣の赤坂山占領の後、狙撃を受け胸部を打貫かれ、名譽の戦死を遂げた。私の所屬副官から知らせがあつた。嗚呼せめて旅順陥落までも生かして置きたかつたと思つた。然し後になつて生命はとりとめたことが知つた。

次に奉天の實戦談をしよう。  
さて奉天の會戦で都新聞が「七弾を受けたる横山鬼少尉」と題し、私の軍服姿の肖像を掲げ、當時の戦況併せて私の亡父や家族の名前等までも發表したので、私の留守宅へ「名譽の戦死を遂

げられた。」と悔に馳せつける者、或は生死如何と訪ねる者、或は香奠として一封を贈られる者もあつた。尤も其の當時新聞に肖像を掲げた者は大概戦死したのであつた。一番痛切に感じたのは、戦場に居る愛子に宛、「お前の中隊長は七弾を受け名譽の戦死を遂げられた」と新聞に出た。お前も此の中隊長さんの名譽を損ね様に勇戦して呉れ。」と書いてある手紙を私の處に持つて來た。私は之を讀終へないうち熱い涙が出て來た。私は此の部下に對し、「いざ死ぬ時が來れば一處に死なう。」と禮を述べて返した。此の時彼の眼にも涙が一ばいであつた。我軍戦勝の起因は此の氣分にありと忽ち勇氣百倍した。  
時は明治三十八年三月八日、私の中隊長は平羅堡といふ部落に獨り残つて外衛兵の重い任務に服してゐた。砲聲は間斷なく聞え

る。今に何とか命令があるかと腕を扼して待つてゐた。すると午後三時左の命令があつた。

「第六中隊は旅團の豫備として即時出發、田義屯に來り旅團に届け出で、命令を受くべし。」と。

此の命令と同時に外衛兵を引揚げ出發した。行程約三里。不完全な地圖を頼みに獨立行進を取る。近づくに従ひ銃砲聲は猛烈、時々砲彈は我等の頭上で破裂する。地圖で彼の部落が田義屯かと豫想し、彼處に進出するには開濶な畝地で極めて危険である。其の距離約二千米、依つて先づ此の附近の村落を偵察して進路を決しようと思ひ、部落の端に出て望遠鏡で右側を視ると、此は如何に、大森林の上空に二個敵の輕氣球を發見した。之が有名な支那先帝の北陵大森林である。尙林端には敵の大砲數門我

等の進路を睨んでゐる。此の場合指揮者として二百有余の部下を如何にして進出せしめるかが大問題で、熟慮斷行を要する時である。然し今は幾多の損害を受くるも躊躇を許さない、意を決して駈足で逐次躍進を開始した。之を見ると敵は直ちに砲撃した。全員悉く畝地に伏した。山口曹長に命じ、此の由を旅團に急報し、今度は各個に躍進を開始した。幸に一人の損害もなく目的地に到着し、即時旅團に届け出た。我が聯隊長餘語大佐は非常に喜び、

「無事であつたか。此の田義屯は頗る危険の場所であるから、部下を損ぜぬ様に用心せよ。お前は此處に居れ。今夜は寒くなつたら、此の後の豚小屋で一所に寝よう。少しは寝ておけ、明日は夜明に攻撃をやるのだ。大原野の會戦で愉快だらう。」

と話して居られる處へ、

「横山中隊長殿へ報告。只今澁谷上等兵と根本二等卒が戦死しました。相原一等卒は負傷であります。終り。」

之を聞いて私は直ちに飛出して其の現場を見たら、火災が起つてゐる。此の火を視て砲弾を打込まれたのだ。他隊の兵にも死傷があつたから、直ちに位置を變更して歸り、聯隊長と豚小屋に同宿した。馬の傍で夢うつゝで眠つた。砲弾は絶えず附近に落下して我等の夢を破る。頭から馬の小便を浴びた兵卒があつて大騒ぎを演じた。

明くれば三月九日午前五時、「横山中隊は即時當村南端に集合し旅團の豫備となり後命を待つべし。」と命ぜられ、其の位置に行くや否や我が聯隊長より直ちに開進を命ぜられ、先づ以て敵状

を視察するに前方約二千米の村落に位置し、我が友軍は頗る苦戦である、依つて直ちに村端より三步間隔に散開を命じ、前進を開始するや、敵は俄に砲撃を加へた。餘語聯隊長は眞先に戦死された。行進中私の横腹邊に一發ズドンと來た。こいつやられたかと駈けながら手を當てゝみるに出血は甚しいが、行動に何等故障なく、度々手を當てみたが、出血は益々激しい。何心なく其の手を嗅いで安心した。それは背負袋中に入れてある家内より送つたウイスキーの壺を打碎かれたのだつた。鼻は少しもくるはないが、眼はくらんで血に見えたかと思へば自分ながら恥入つた。此の時前面には佐倉の歩兵第二聯隊が苦戦中である。此の伍間に増加して射撃を開始した。間もなく聯隊副官茂木大尉が戦死と聞く、敵は諸方より猛烈に銃砲火を乱射した。我が

中隊の小隊長二名戦死、尙一名は重傷と報じた。何れも下士が代つて指揮するも之亦死傷した。忽ちに戦況慘憺たる光景と化し、時に幸か不幸が暴風俄然起り、砂塵万丈朦朧として射撃目標も全く視ることが出来ない。午後二時と思ふ頃我が左翼諸隊は敵の大部隊襲來のため、逐次退却を報じた。私は直ぐ望遠鏡で之を視るに、幽かに大なる敵軍を認めた。此の際ヒューと飛び来る一弾、私の頸部にどしんと當つた。打倒れて一時死んでゐるが、我が砲二門の打出す砲聲で蘇生した。自分は今頭を打碎かれた様だと思ひ、手で檢したが、何の異状もない。さては砲弾の破片でも頭にぶつつかかり脳振盪で假死したのだと思ひ、其の儘砲兵援護のため頑張つて戦つた。敵は左側から壓迫し來り二本の軍旗を視るに至つた。我が左翼隊は逐次退却して

危機愈々迫る。今や躊躇する場合でないと判断し、即時退却した。負傷して歩行出来ないものもあつた。田義屯に着いて人員を調べると、僅か四十九名、他の者は如何したかと嘆息した。鈴木特務曹長は運よく助つて力を得た。此の曹長に、「私の頸頂部を見て呉れ。何だか背中の方まで變だから。」と言つて調べさせた。ら、「頸部に穴があいてゐます。」と言つた。繃帯も出来ないから捨て置いて、隊伍を整へ敵の襲來に應ずる準備をした。日暮となると、敵我が田義屯に向ひ襲來したが反つて我が待構へたる銃砲機關銃のために多大の死傷を遺棄して退却した。

### 第二十三課 相模三之宮古墳群

中郡比々多村は隣村なる成瀬・大根・金目の諸村と共に、相模の山岳區と平野區との接合地点にあたり、大山（雨降山）を西



北に負ひ、東南は濶達たる平野に蒞み、花水川の上流をなす鈴川は大山町子易より來つて域内を流れ、形勝の地をなして居るので、村内に石器時代の遺跡遺物があり、次いで古墳や横穴の如き、金石器併用時代、金屬時代初期に屬する遺跡や遺物が極めて多く、一大古墳群をなして居る。高座郡海老名村と共に顯著なる遺跡地で、古相武國に於ける文化の中心地であつたことを想定せしめる。

私は此の比々多村の古墳群へは大正十年頃から屢々見に來た、墳丘の形狀からいへば圓墳又は前方後圓墳で、構造は概ね積石塚で石槨を有するものは堅穴式石槨が多い。

比々多村三之宮の地は上御領原・下御領原・上初川・中初川・下初川・野首・上伯母様・中伯母様・下伯母様・上谷戸・中谷戸・下谷

戸・宮前・宮上・上尾崎・中尾崎・下尾崎・上栗原・中栗原・下栗原・御所谷・鍛治久保・銅産窪・金山。

等の小字に分れて居る。其中上初川、中初川、下初川の地は其の地形より考へて、其の地名に察して、もと鈴川が流れてゐた痕跡であらうと思ふ。従つて此の字には古墳はないが、御領原・野首・谷戸・宮上・鍛治久保などには墳丘が點在してゐる。

それ等の墳丘の中にはほゞ原状を保てるもの、積石や石槨が露出ししかつたもの、濫掘されて積石や石槨の石が散乱したものの、耕地を広げる爲に覆土の周圍より次第に削り崩して申譯らしく土塊を残すものなどがある。が、組織的に發掘されたのは明治三十三年三月坪井正五郎博士によつて發掘された野首と下谷戸のものが始である。下谷戸の古墳は堅穴式石槨で石槨の長さ八メ

一メートル三十六センチ、幅一メートル乃至一メートル四十八センチ、深さ一メートル二十一センチ乃至一メートル五十二センチである。そして其の出土物は坪井博士の圖示せられたものによれば、直刀三振、短刀一振、小柄一振、鐵鏃四十五本、圭頭大刀柄頭金具一箇、鞆尻一箇、雲珠二箇、轡一箇、轡の飾り一箇、金環十八箇、銀環三箇、鐵環一箇、匂玉五顆、玉造石管玉二顆、水晶切籠玉三顆、琥珀玉二顆、水晶玉一顆、瑠璃玉大七顆、同中十顆、同小五顆、瑠璃色硝子玉中四顆、同小百八十二顆、硝子玉小五十顆及び丸玉大小十二顆。等である。

其の他此の邊一帶の地から出た古墳時代の遺物や比々多神社附近から出た石器時代の遺物は同神社の永井健之輔氏が蒐集して

居る。又下尾崎には横穴がある。それも先年踏査したのであつた。然るに本年五月同地の太矢徳太郎氏及江原善藏氏から、踏査を求められたので、六月二十九日、神田重夫氏と共に同地に向つた。これまでは多く伊勢原町から行つたのであつたが、今度は小田原急行鐵道の鶴巻温泉驛に下車して笠窪を過ぎて三之宮に入つた、古驛路の箕輪の驛址は明らかであるが、大住郡にあつた頃の國府の址は明かでない。しかし串橋の邊であるに違ひないと思つてゐるので、此の邊を歩いて見たいからである。けれども今日は先約があるから、この問題を後に残して比々多小學校に至つた。校長重田政三氏、江原善藏氏及び偶々同校に來合せられた伊勢原高等女學校校長飯塚源太氏に會つた。江原氏に同氏が作製された比々多村圖を見せてもらひ、墳丘や横穴の分布

圖作製のこころなどを話した。同校には三之宮から出た直刀（永井氏寄附）がある。刀身全長一メートル二センチ、幅三センチ六ミリ、莖の部分十六センチメートル、目釘穴三箇がある。同校を辞して三之宮字原田五百三十八番地なる大矢徳太郎氏の家に至つた。大矢氏は日清、日露の戦役に従軍された陸軍歩兵中尉であるが、年漸く老いて今は郷閭に在つて耕耘を事として居られる。同家の敷地五百三十八番地及び五百三十九番地には大きな墳丘―積石塚があつたと見えて、屋敷の周囲や道路などに古墳から出た多くの石が利用してある。そしてこの古墳から出土した物は、大矢氏が軍務に服されて居る間に、先代によつて蒐集されたが、其の在世中は全く他人に見せられなかつた。近年に至つて氏が二三の人に縁ばたで一寸見せられた位で、まだ細

かな發展などは無い。

瑠璃色硝子小玉百二十八顆、瑠璃色及び綠色丸玉八十七顆、瑠璃及び碧玉の勾玉九顆、（大なるもの長さ四センチ小なるもの二センチ四ミリ）、琥珀玉一顆、管玉二箇、切籠玉十一顆、棗玉十二顆、金環三箇（大は徑二センチ七ミリ、小は徑一センチ八ミリ）、銅環一箇、鋸釧一箇（徑八センチ二ミリ）、石帯のびじやう金具一箇、石英凸字形飾石（高さ二センチ一ミリ、横三センチ六ミリ）五箇、其他直刀破片小刀、鐵鏃三本、轡、壺鐙等の武器、馬具がある。

それ等の古墳出土の遺物を見て大矢氏及び江原氏より調査を求められた遺跡を見た。それは同家の建物の下にある大きな穴に就いてである。座敷の裏庭に面した一隅から梯子によつて下る

こと約二メートル、そこに奥行二メートル十二センチ横一メートル五十二センチの矩形の室があつて、其の側壁には多少の石を用ひてある。其の室（A室）からは東面の一方を除いて三方に横一メートル高さ一メートル位の入口によつて他の室に續いてゐる。即ち其の北なるもの（B室）は奥行三メートル六十四センチ横二メートル十二センチ高さ一メートル五十二センチである。西につづくもの（C室）は奥部が崩れてゐて明かでないが、奥行一メートル七・八十センチ横一メートル八十二センチである。棒を以て探れば更に他の室に續くもののやうである。またA室の南にも約一メートルの棒が入るから更に室があるに違いない。それ等の墳には何れも砂が豊富にあるので、曾てコンクリート製造の爲に石油箱に百杯も出したといふことである。又

B室からは灰が出るが、之は大矢氏が火災に二度も遭つたと言ふから、其の時の灰が混じつたものであらう。同家所蔵の古墳要するに此の穴は古墳時代の地下式壙である。同家所蔵の古墳出土の遺物に考へ、曾て敷地内に大きな墳丘が存在したといひ、そしてかうした地下式壙があるのであるから、古墳時代に於て相當の豪族が占據して居たものと察すべく、又當時の文化の一斑をも知ることが出来る。詳細なる報文は別稿を以てし、ここにはたゞ見聞のまゝを記す。

（石野英氏寄稿、氏は文學士、考古學者、武相古代史外多くの著書がある。）

### 第二十四課 成田伍長

歩兵伍長成田與一君は、護國の神として靖國神社に祀られた。

それは濟南事變・霧社事變・日支事變に、君國のため名譽の戦死を遂げた軍人五百三十一名を合祀せられた昭和七年四月二十五日から二十七日まで三日間の臨時大祭が行はれ、社頭は櫻花既に散つて葉櫻のすがくしい時であつた。

成田伍長は、比々多小學校・實業補習學校に勉學し、青年訓練所を修了した。両親には孝心深く、多勢の姉妹弟には友愛の心厚く、中肉中脊の體には質實剛健の氣風が溢れてゐた。

壯丁検査に見事合格して、台灣歩兵第二聯隊第三中隊に入營したのは昭和四年の六月で、人一倍軍務に精勵し隊中の模範兵であつた。私は是非成田君の壯烈なる戦死を語りたいたのである。

入營の翌年十月二十七日、台中州下霧社の學校で運動會が開催された時である。暴悪な蕃人約八百突如として會場に襲來し、

郡守を始め内地人多數を殺戮し、附近の駐在所を焼討して巡查及び家族を殺害し暴動を起した。十一月二日愈々成田君所屬の大隊に討伐の出勤命令が發せられ、四日午後にはマヘボ社を奪取し、續いて東方の千米高地を占領し、直ちに夜を徹して陣地が構築せられた。

翌五日午前十一時過ぎ、第一大隊七七四四高地の攻撃を開始し、峻坂險路に加ふるに丈なす雜草や蕃木密生する中をよち登つて行く第三中隊、その先頭の第一小隊第三分隊にわが成田君の英姿が勇躍して居る。やがて目的地點たる一文字臺を占領すると見るまに、にはかに新手を加へて勢力を増した兇蕃は俄然猛射を浴せ來たので中隊は直ちに射撃を開始した。

此の時第三分隊は中隊の最右翼に在つて、正面及び側面から雨

と飛來する敵の猛射に應戦してゐる。敵は高地或は樹上を利用して、益々烈しく射立てる。我は草木地物の據るべきもの無く、全く身を敵前に露出しての戦であるが、勇敢な我が強者は沈着にして毅然そのものの如く、成田君は「何を！生蕃。」と高語しつつ、恰かも演習時のやうに平然自若として射撃を續けてゐた。忽ち前進の命令一下、君は身を抜んじて先頭に立ち、我に續けとばかり奮進し、敵弾の間隙を利用して前進するうち、一彈來つて足部に命中する。剛毅なる君は神色自若として毫も動ぜず、英風益々あたりを拂つて勇躍又勇躍、將に敵線に突進せんとする時、側面の藪の中から覗つたであらう彈丸に胸部を打たれ、「やられた。残念!!!」と叫び、倒れたが、又起上り、

「彈丸を受取つてくれ。」と戦友に渡したまふ、壯烈な最後を遂げたのである。沈着にして剛毅、奮闘勇躍した忠勇凛烈の状は、鬼神をして泣かしめるものである。

所屬中隊長阿南大尉は、成田君の行動に就いて、  
「上等兵ハ常ニ至誠事ニ從ヒ、卒先事ニ當レリ。第三分隊ガ克ク任務ヲ盡シテ中隊ノ目的ヲ達セシメタルハ、上等兵ノ力ニ依ルモノ多大ナリ。此ノ日戰鬪ニ於テ敵將モウナルヲ斃シ、兇蕃ヲシテ起ツ能ハザルニ至ラシメタリ。其ノ行爲ハ實ニ軍人ノ龜鑑ニシテ、武功拔群ナルモノト確認ス。」  
と稱してゐる。

成田君名譽の戦死して一年六箇月、その英靈は靖國神社に鎮

められ、永く護國の軍神として武士道の精華を誇る日本國民に  
仰がるゝのである。

本文を草するに當り、忠勇顯彰會編纂の忠勇列傳及び台灣歩兵第二聯隊第二中隊歩兵曹長本山勝  
美氏より成田家に贈られたる書面に依つたことを附記す。尙成田君に對する感激や慰藉其他多く  
の材料があるが惜割する、

(横溝今次郎氏寄稿、氏は本村笠窪の人、本校卒業後神奈川  
縣師範學校に學ぶ、神田、比々多、伊勢原の校長に任じ、  
又神奈川縣教育會主事となる。本縣教育會の功勞者。)

第二十五課 比々多村青年團辯論部の歌

一  
天下に敵する八州の  
鎌倉武士の名も高き、

相模の國の中しめて、  
北に阿夫利の峯聳え、  
東鈴川水清く、  
風土豊けき比々多村。

二

至誠を以て本となし、  
勤勞・分度・推讓の  
徳をそなへし、報徳の  
教を村の則となし、  
日進月歩たゆみなき、  
誓は固き青年團。

三

身は活動の基礎なりと、  
 鐵腕きたふる体育部。  
 月雪花の眺にも、  
 興趣は盡きじ文藝部。  
 音吐朗々熱烈に、  
 立つは我等の辯論部。  
 四  
 東亞教化の根本は、  
 大聖孔子の至言なり。  
 靈鷲山の説法は、  
 浮世の闇を照らすなり。  
 道行く人と論じては、

眞理を傳ふるソクラテス。

五

大は國家の政治より、  
 小は個人の私交まで、  
 圓滿完全期すべきは  
 舌三寸の力なり。  
 振るへや振るへ、辯論部。  
 振るへや憲政治下の民。

第二十六課 實 習

農業實習のある日。それは私たちにとつてずるぶんうれしい日  
 です。家に歸つても子守位で、野良仕事などしない私にとつては、  
 學校で皆ま一所になつてする實習は、どんなに面白い一時間だ



か分かりません。土曜日の三時間目、このうれしい實習でした。朝からの風はまだ止まらずに吹いてゐました。先生の指圖によりそれ／＼鋤や鎌をもつて擔當區になつてゐる苗圃に行きました。霜除けの下で寒さとたゞかひながら冬をしのいでゐるヂギタリス、寒風に吹きさらされてゐる梅の木の下の矢車草も、ほんとうに今朝の寒さには弱つたやうでした。私たちは石竹に肥料をやり、土をよせて暖くしてやりました。隣の組でも皆一生懸命になつて花げしの間引や、草むしりなどして居られます。今朝の風に壊されたのか、三組は先生も一所に霜除けの屋根を直して居られます。何か面白い事でもあつたのでせう。笑聲が聞えます。

かうして自分等の區を皆一心になつて手入をしました。むしつ

た草や、間引したのが道一ぱいになりました。それをはきよせて捨てに行くと、桑畠のまゝに小さな赤い花が咲いてゐました。近よつて見れば去年すてられたのか、かはいらしい万年草でした。落葉をのけて見ると、小さいのがたくさん出てゐました。私はこの可れんな草花が何となくいちらしく思はれてなりません。元のやうに枯草を集めて着せてやりました。

三時の終の鐘が理科室のわきからかすかに聞えて來ました。びつくりして立上つて見ると、どの組もきれいに片づいてゐました。先生も級のものも皆こちらを向いてにこ／＼してゐられました。一人ぼつちにされた自分が急にをかしくなりました。きれいに掃除された霜除けの下に、小さい草花が行儀よくなら

んでゐる。去年あんなに苗圃や學校園をにぎはしてきれいに見せてくれた草花も、かういふふうに辛い冬を越して來たのかとつくづく思ひました。やがて來るたのしい四月の候を待たれるやうに思はれてなりませんでした。

## 第二十七課 弔 辭

我が比々多村教育施設の上に、特筆大書すべき昭和典禮の記念事業畧成り、限りなき喜悅の笑みを漂へつゝ、舉村一致全校總動員の下に、昭和第四の元旦を迎へ、木の香薫る新築の講堂に於て、祝賀の式は意義深くも舉行せられたのであります。長閑なる陽は清掃せられた校庭を一増引き立てて、如何にも太平の御代を壽ぐに相應しい感じを投げて居ました。私はこの感謝

に浸りつゝ、芽出度く式を終了いたすことを得ましたが、式後何者か求めんとして求め得ざる深き憂ひに鎖ざされたのでございます。何か。それは今回本校増改築に對し建築委員として、將又村會議員學務委員として、一方ならぬ御盡力御後援を賜はりました、尊き君の御姿を遂に何處にも拜することが出來ませんでしたこと、それでありました。爾來充たされぬ不安の中にお正月の行事を進めて参りました所、突如君の訃に接したのてございます。

嗚呼悲しい哉。神悼み魂くらんで暫らくは茫然自失、唯夢ではないかと我々我が身を疑ふより外何物もありませんでした。君よ、君の病床にあることはほのかに存じて居りましたが、かくまで重り行く経過を辿られ、遂に幽明境を異にし九今日の御姿

を拜しようごは、私は親しく君の病床を訪れて、數々の御禮を申し述べる機會を逸しましたことを、衷心より残念に存じます。ご、今又君の御靈を拜してその風貌を髣髴し、その崇高なる人格を目のあたりする心地がいたしてなりません。君よ。君は才氣煥發一生を派手に送つた政治家風の肌でなく、着實重厚身を以て衆を率ゐる不言實行の人でありました。孜々として倦まざる意志の人でありました。聞く明治三十七年、日露の國交斷絶するや、國を擧げて多事多難の時局に直面いたしました時、君衆望を負ひて比々多村助役の重職につき、緻密なる頭腦と篤實眞摯なる資性とは、よく時の村長を補佐して餘りありといふべく、その涙ぐましき奮闘努力については、眞に感激の外はございません。同三十九年功によつて、勳八等瑞寶章を賜はりました。

あゝ天恩の君に降し給ふ誠に宜なる哉であります。又大正十二年關東地方の大震災の時には、君の部落も亦その災厄を受けて非常な困憊を來しました。當時坪之内區長たりし君は、自家の災害をも顧みず、率先部落の救済に任じ、東奔西走夜を日についでまめ／＼しく立ち働かれました御姿は、今尙村民の腦裡に深く印象されて居る所でございます。而かも悠揚迫らざる中に、君は又公正不偏の人でありました。而かも悠揚迫らざる中に、細事に亘り親切によく面倒を見て下さいました、その潤ひのある温情は、君を知る到る所に美談として残されて居ります。本縣青和會が融和事業の役員として、將又思想善導の指導者として多大の期待をかけ、その実績の顯著なるを見て深き敬意を拂はれたことも、その一端を伺ふに足ると存じます。今日君が

燈錢會の會長として、その信望を一身に集め、君獨特の天地を打開して情味豊かな統整の麗はしさを見るも、到底君でなくてはなし得られない尊い体験の賜で、君の面目茲に躍如としてをります。君は又本村報徳社の理事としてよくその主義の徹底を圖られ、村是の確立に力を致されました効績も、亦没すべからざるものでございます。その他青年團の指導に、産業の開發に、献身的努力を捧げられ、親愛の誠を致されましたこと等、數へれば君が公共の爲に盡くされた遺業と、その精神は實に偉大なものでありました。今にして之を思へば、比々多村の今日ある誠に君に負ふ所、亦多大なりと申しても敢へて過言ではないと存じます。君は又家庭の慈父として、子女の教養に力を致されました。愛して溺れず、緩急よくその度に適ひ、夫々天稟を

全うすることに努められました。長子三代治君は少壯有爲の小學校教員としてその名高く、次子久君は國家干城の模範士官としてその將來を囑望され、三子三郎君亦商科大學に於て、その明敏を歌はれてをります。その他の子女いづれも衆羨望の的となつてをられますのも、君が訓育の賜たらずんばあらずです。嗚呼君が五十有七年の生涯は、全く精神の生活でした。黙々の裡に實行の足跡を印した。尊い生活でありました。名利の爲に生き九片鱗だも認めることの出来ない、信念の生活でありました。本村は今この偉大なる人格者を失ひました。誰か愛悼痛惜の情に堪へませうや。而しながら君の肉體は死しても、その精神は不朽です。不滅です。否今尙徳化して止む時はありません。政三切々の情胸に迫り辭の出づるを知りません。

魂よ。希くは來り饗けよ。  
昭和四年一月十一日  
比々多尋常高等小學校長 重田政三  
前任比々多村長吉川佳五郎君ノ靈前ニ謹ンデ告グ  
君ハ性温厚篤實志操廉潔ニシテ頭腦明晰人ニ接スル温和情誼ニ  
厚ク、其ノ德望高大ニシテ知ル者知ラザル者咸ナ君ヲ慕ハザル  
モノナカリキ、豈圖ランヤ一朝俄然病ニ斃ル。訃音ニ接スルヤ、  
哀悼極リナク悲涙ノ情交々臻リ語辭亦出デザルナリ  
回顧スレバ君ハ絶エズ陰ニ村治ニ盡瘁セラレ、特ニ昭和二  
年一月擧ゲラレテ村長ノ職ニ就クヤ、我ガ村組織以來未ダ一任  
期ヲ完ウセラレシ者無キヲ憂ヘ、専心誠意終ニ其ノ任期ヲ完勤

セラレシハ本村ノ矯矢者ニシテ、克ク村ノ弊ヲ打破シ範ヲ後世  
ニ胎サル、君ノ恪勤ナルハ此ノ一事ヲ以テモ他ハ推シテ知ルベ  
キノミ。其ノ功績ヤ偉大ナリト謂フ可シ。  
尙村治ノ前途頗ル君ヲ須ツモノ多ナルニ溘焉長逝セラル、何ゾ  
無情ナル哉。蒼天何ゾ果敢ナキ哉。人誰カ君ヲ惜シマザルモノ  
アラン。今ヤ幽明遠ク相隔リ追悼スルモ亦詮ナシ、然リト雖モ  
君ノ遺範ハ皎々トシテ後世ニ輝ク其ノ力大ナリトス。君宜シク  
瞑スベキナリ。嗚呼悲イ哉。

昭和七年一月二十九日

比々多村長 小古林 安五郎

第二十八課 古代に於ける我が比々多村

天に日月星辰あり、地に河海山嶽ありて奔流起伏す。人其の間

に生まれ、茲に社會をなし茲に國家をなす。靈妙なりといふべし。一度思を彼に馳せ、退いて自ら省る。誰か驚異の情を起さざるものあらんや。嗚呼天地の悠久なる、古來星霜幾變遷。其の幾多の星霜を経て本村に存在せる石器時代遺跡の廣大なる、吾人祖先の遺跡たる古墳の累々として存在せる、又以て考古學上の資料たるのみならず、治乱盛衰の跡を尋ねて吾人處世の教訓となし、子々孫々に範を垂るゝに足らざらんや。

舊史に曰く、崇神天皇の御宇、天社、國社、神地、神戸を定むと。傳に曰く、比々多神社は崇神天皇の勅願所にして、同天皇の御宇、神地神戸を定め給ひ寄せ賜ひきと。當社封戸たりし神戸の地名現に存す。而して此の時代に於ける吾人祖先の此の地に發祥せし所以のもの豈偶然ならんや。

回顧すれば三千年以前、或は四千年五千年以前さもいふべき石器時代の遺跡〔石器時代とは石を以て刃物の原料としたる時代を謂ふ。今日と雖もアメリカ、南洋等には此の時代の有様を存する未開野蠻人あり。我が大日本の地に斯くの如き人民の居住せしは太古の事に於て、其の年代は今を去る大凡三千年以前の頃ならんと考へらる。日本に於ける石器時代の人民は決して我が日本人の祖先に非ず。全く人種を異にするものなり。〕とは明治三十三年三月三十日小生方に於て比々多小學校高等科生徒其の他有志者の爲、東京帝國大學理科大學教授理學博士坪井正五郎先生の講話せられたる一節なり。〕は現今社地續き北方にあり。明治三十三年三月坪井先生、永井潔及び小生三人にて、三時間ばかりにて戸板三杯程も石器、土器等を蒐集せり、(現品は東京帝國大學に保管せらる。)其の器物に就いて見る

に信州式あり。遠州式あり。越後式ある等其の當時の交通状態を識るに最も有益なる参考資料にして、樞要の地たりし事は明瞭なる事實なり。堀田文學士が其の時代の堡塞の蹟ならんか説かれたるは其の所以なしとせず。其の遺跡地と稱するものは廣さ約四十アールあり。

先づ近き邊の連絡を考ふるに、東に川上、日向、七澤、小野。一つは東大竹、岡崎方面。西に北矢名、大槻、井の口、西久保。小竹を経て二之宮方面。一は寺山、箕毛方面。一は澁澤を経て山田、曾我。南は北金目、上吉澤、萬田、國府方面に連絡する等尤も面白き事ならずや。

三千年のその面影の偲ばれて  
昔ながらの足あとも見ゆ

石器時代の人民は食を天然の物資に求め、魚具、植物、鳥獸等を日常の食料とせしは遺物たる石皿、石臼、皮剝具、貝塚等によりて想像せらる。又諸種の編物は現存せる土器に就き知る事を得。その他打製石斧、磨製石斧、土器等に依りて見るに、相當の美術工藝に關する考をも有せしものならん。鬪争用としては石槍、石鏃、石棒、石劍等見るべきものあり。發火器あるを見れば火を用ひたることも知られ。土偶を見れば其の當時の風俗の幾分かを窺ふ事を得。遺物の所在地より見て、此の風景美なる高臺に幾多の星霜を送迎せしも、優良なる日本民族の發展と共に他に移住せしものならん。

日本民族は足柄の天嶮を踰え、當所を根據地と定め、國土經營の神として比々多神社を創建し、崇敬尊信すると共に、民族の

團結を固うし、「此の漂へる國を修理固成。」の御神勅を現實にし、關東に大發展せしものならん。

古歌に

おやおや親の親をし尋ねれば

遠つ御祖は神にぞ座しける

神こそは野をも山をもつくりをけ

人にまことの道をつめとて

思半に過ぐるものあらん。

吾人今日此の美事なる山林、美なる田畑何れも祖先の勤勞によらざらんや。此の祖先の勤勞を思ひ、孜々として止むなくんば子孫長久の策なると共に、國家の繁榮期して待つべきのみ。吾人幸に生を神州に享く、豈木石と同じからんや。祖先勤勞の

跡を尋ねて、奮勵努力、報本反始の誠を致さざるべけんや。

報徳二宮先生歌つて曰く、

「田畑山林は祖先の勤勞にあり。」

と眞に然りと云ふべし。古墳時代の遺物とは何ぞ、田畑山林是なり。此の偉大なる御遺物を等閑に附して、徒らに土偶、土馬其の他種々の古墳物に熱中するは元來余の本旨に非ず。世人余を目して骨董屋視するものあり、誤れるの甚だしきものと言ふべし。余の目的とする所は種々の古墳物に就いて考ふるのみならず、如何なる高貴なる方の居住せられしか、其の高貴なる方は何が故に此の地に居住せられしか、何の故に其の高貴なる方の古墳の多きか、古代に於ける我が比々多村の如何なる地位にありしかを考へ、以て郷土を愛するの觀念を鼓吹し、祖先の經



營し給ひし國家を隆盛ならしめんとするに外ならず。建國以來數千年、實に世界無比の貴き國なり。最も舊き國にして常に生々としたる新しき國なり。此の生々として新しき國が、未來永遠に天地と共に窮りなく、燦々として光を放たしむる所以のもの豈偶然ならんや。

本村に古墳存在せる位置より述べれば、先づ善波、坪之内、笠窪、串橋、神戸方面より、全部古墳なりと言ふも可なる三之宮東西部、木津根、白根等其の尤も著名なるものにして、文學士石野瑛氏が相模三之宮古墳群と稱するも其の故なしとせんや。崇神天皇の御宇、皇族の方々が四道將軍に任命せられしより、朝廷の御威徳六合に洽し、而して我々大和民族は古代よりの國民性として元氣よく活動し、各々其の業務を發展せしむると言

ふことが即ち「修理固成」の御神勅の精神にして、其の精神の發露が奔流起伏せる山嶽河海を拔涉して當地に來り、千辛万苦して國土を經營し、美なる山林田畑を造り、社會百般の施設も具備せしものならん。

古墳よりの出土物を見れば、最近製造法を發明せしと言ふガラス玉等多數あり。誰か驚異の感なからんや。又精巧極りなき金環、銀環（一見純金銀としか見えざる）の如き如何に工藝の進歩せる。玉類を愛用せられしは、吾人祖先の如何に圓滿なる思想に富み給ひしかを敬慕せざるべけんや。古語コトムケヤハスの意義味ふべきのみ。加ふるに勇氣と決心とを表示する劍を以てす。千萬無量。吾人處生の要件として進歩せる思想、圓滿の徳、義勇公に奉ずるの精神とを具備せば、天下何事か成らざら

ん。  
此の古墳群より前方を望めば、高麗山脈連綿として西方箱根山に接続し、東海の名山富士の靈峰を仰ぎ、北に阿夫利山丹澤山等の山岳連なり、前面平塚方面より接続する水田により古代の面影を考ふるに、常陸霞浦の状態ならんか。地名より見るに狐橋、丸島、岡崎、小鍋島、大島、下島、見附島等思ひ半に過ぐるものあらん。  
前述の如く、北に山を負ひ前に海を望み、樞要の地たると共に風景の美なる、古人も茲に見る所ありしならんか。石器時代遺跡の廣大なる、吾人祖先の古墳の累々として存在せる、其の故なしとせんや。  
(永井健之輔氏寄稿。氏は比々多神社社司、考古學の造詣深し。)

第二十九課 聞取帳より

一、鉛筆の先  
「綴り方の成績は書いてる時の鉛筆の先の走りによつて知れる。」

と芦田先生は言はれる。  
面白い言葉だ。堂に入った人は目の着け所が違ふ。我々の魂は行のどこかにあらはれるものだ。

二、蠶室の匂

杉崎さんの話によると、  
「蠶のよしあしは蠶室の匂で知れる。一々籠を引出して虫を見るやうではまだ未熟だ。」と。  
流石に養蠶に魂を打込んだ熱心家だけある。

三、 箒の音  
信州から度々お蠶の話に來られる久保田さんは、  
「女中の給料は座敷を掃く箒の音できまる。」  
と言はれる。同じさらさらとする箒の音にも人間の價値は表は  
れるものか。

四、 飯の食振

或學校の入學試験の時のことである。

附添が四五人集つて受験者の批評を始めた。

「私の方では三人來たが、一人は飯の食振が悪いから駄目だ。」  
と山本さんが言つた。

妙な事を言ふと思つたが。結果はやはり其の通りであつた。

五、 稻の言葉

「稻の言葉がわからぬやうではよい農業者にはなれない。」と或  
人が言つた。

稻も物を言ふかしらと思つたら——朝に夕に田廻りをするとか、  
水がほしいとか、肥料が足りないとか、何だか身體の工合が悪  
い、病氣になりさうだとか言ふさうである。それが聞えなけれ  
ば立派な農業者ではないさうである。

第三十課 陸軍記念日講話

本日の陸軍記念日に皆様は御話が出来ますのは誠に嬉しく存じ  
ます。本日は奉天會戰に於ける我が軍に戦況最も有利なる日で  
ありましたにより、此の日を以て全戦役に於ける陸軍記念日と  
して往事を追懐することにせられたのであります。横山は此の  
名譽ある記念日に、自分の親しく参加し且負傷致しました旅順

ナマコ山の戦闘に就いて御話申し上げませう。旅順は敵が平時から澤山の金と多くの年月とを費して要塞を築いたのでありますから、其の攻撃は誠に困難で、所謂一夫守れば萬卒進む能はざる所の金城鐵壁でありました。明治三十七年八月十九日より第一回の總攻撃がありました。一部を占領し得た許りでありますから、九月十九日からは更に第二回の攻撃を實施せられたのであります。此の第二回の攻撃には横山の屬して居る隊はナマコ山に向ひました。此の山は非常に峻しい岩山で、徒で上るのも骨が折れます。敵は此の山の巔頂より少し下の所に、鉢巻の様に散兵壕を構築して居り、直ぐ其の前には鐵條網や地雷を布設して、我等の通れない様にしてあり、又頂には大きな大砲が二門ありました。十

九日の午後三時になります。我が砲兵が此の山の敵を射撃し始めましたから、横山の隊は一所に此の敵を射撃しまして山の麓から上り始めました。敵は散兵壕に據り、上には厚き鐵板があり、前には小なる銃眼から銃口を出して射撃して居るのであるから、我が弾丸は中々命中しない。誠に残念だけれども仕方がない。敵は盛に射撃し、機關銃も大砲も又我が隊を撃ちまして、小銃の弾丸はびゆうんびゆうんと呻つて来る。機關銃ががたく／＼すると思ふと、弾丸が雨霰の様に落ちる。空中にこんこん呻つて通るものがある。恰かも汽車が通つて居る様だ。是等弾丸の爲に、暴露して居る我が隊は續々死傷者が出来ませんが、一向頓着せずにとどしとし山を上りましたが、前には鐵條網があつて通れなくなりましたから、決死隊を撰抜して鐵條網を切ら

せましたが、何れも敵から射撃せられて、我が兵は戦死若しくは負傷する許りでありまして思ふ様に出来ません。其の中に日も暮れましたから、夜間視えない中に破壊するに限ると思ひまして壊しますけれども、敵もさるものさう容易に壊させません。時々探照燈や光弾で照らします。是等のもので照らされると全く晝の様に明るくなります。此の間に機關銃等で、壊して居る者を盛に撃ちますから中々容易ではありません。夫でもいくらか晝よりは容易であります。故に多くは夜間是等の事を致しました。晝間寝て夜間働きました、恰も木兎たぐか梟たふしの様でありました。鐵條網を切るのには大きい鋏で切ります。立つて居ると直に射撃せられますから仰臥をして切りました。其の内に鐵條網も一部破壊することが出来まして、辛うじて通れる

様になりましたから、聲を出さずにさうつと突撃しました。夜間聲を出しますと、敵にしれまして諸方面から盛に射撃せられますから、さうつと不意に突撃したのであります。此の突撃と共に敵の居る所へ爆薬を澤山投込みました。敵も一生懸命に抵抗致しまして爆薬を投げたり、其の他機關銃や小銃で盛に射撃します。我が隊に死傷者が澤山出来ましたが、遂に勇敢なる我が兵は此の中腹の散兵壕を占領致しました。敵の逃げ残つた兵が二三名居りましたのは突撃しましたが、敵は直ぐ山頂の後に未だ澤山居ります。時々夜間さうつと来て爆薬等を投げては逃げ歸りまして、其の度毎に若干死傷者が出来ました。味方もさうつと匍匐して敵に近づき爆薬を投げさせました。占領し場所には直ぐ土囊を以て散兵壕を作りました。

其の中に夜が明けましたけれども、山全部が未だ占領出来ません。敵から射撃せられて堪らない。更に勇を鼓して第二回の突撃を致しました。所が諸方面から此の山に砲弾を浴びせ掛けましたから、山は砲煙を以て蔽はれ火事場の中に居る様で、直ぐ前の敵も煙の爲に微に見える許りでありました。此の時山の北側には味方が居り、其の南側には敵が居つて互に頂を隔てて對戦致しました。巔頂に出れば直に機關銃や砲弾で射撃せられるのでありますから、頂を隔てて對戦致して居りました。それ故に思ふ様に射撃が出来ませんから、爆薬を投げましたけれども、爆薬の數には限りがあります。多くの者は石を投げて戦闘し恰も石合戦の様で、實に珍妙な戦闘でありました。其の中に横山の左胸に「ボキリ。」と非常な音がして當つたもの

がありました。横山は未だ弾丸に撃たれた経験がありませんでしたから、何だか分らない。敵が非常に力強く石を投げて其の石が當つたと思ひまして、其の儘戦闘をして居りましたが、少し痛みを生じましたから視ますと、血が流れ出して居ります。夫で始めて弾丸に撃たれたのであると氣付きました。さうかうする中に、遂に此の山は全部占領することが出来ましたから、横山は安心して看護卒に繃帯して貰ひ、假繃帯所に行きました。此の戦闘で敵の大尉一名、下士以下數名捕虜となり、大砲二門と魚形水雷一箇、その他澤山の小銃を鹵獲致しました。皆様、山の上に魚形水雷があるとは誠に不可思議のやうであるけれども不可思議で無い。露國艦隊が我が東郷艦隊に封鎖せられてどうすることも出来ないから、窮した餘りに山の上に引上げて撃たん

としたのでありませうけれども、河童が陸に上つては思ふやうな働が出来ないと見えて、其の儘我が隊の鹵獲品となつたのであります。此の戦役に於きまして、敵は我が軍よりも兵力も多く、兵器・材料・馬匹等も概して我より立派で、其の上に豫め準備した堅固な地形を頼みこして居ましたが、負けたといふことは能く考へなければなりません。我が軍の勝利を得たのは、天皇陛下の御稜威の然らしむる所ではありますが、我が将卒の忠君愛國の精神に富んで、君の爲國の爲には一身を捨てて顧みないといふ軍人精神が主なる原因をなして居ります。我が軍隊は一度宣戦の大詔が發布せられますと、欣喜雀躍一日も速に出征して君の爲に盡くさんとして居る。それ故に前進の號令がありますれば山があらうが、川があらうが、鐵條網があらうが、地

雷があらうが斯くの如きものには一向頓着せず小銃や、機關銃や、大砲でどしどし射撃せられても、既に生命は無いものとして居るのであるから更に構はない。血は流れて川となり、屍は積つて山となるも目的を達成しなければ已まないといふ金鐵よりも堅い精神を持つて居ります。斯様に勇敢な將卒で、日本國民全般は女子供に至るまで、どうしても露國に勝たなければならぬと一心不乱に軍隊に聲援を與へましたから、軍隊は強い上にも益々強くなる。之に反して露國では、革命黨が起り國內の輿論が一致せず、軍隊は忠君愛國の至誠に乏しい、中には實にいや／＼ながら戦闘をして居りましたものもありました。それであるから戦争に負けました。戦争といふものは、兵力の多寡、兵器の優劣よりも、主に忠君愛國の精神の多少によつて

勝敗が定りますといふことを忘れてはいけません。皆様の先輩の御方は能く君の爲國の爲に盡くしましたから、我が國は未だ嘗て一度も外國に負けたことの無い立派なる歴史をもつて居ります。此の立派なる國を益々立派にするのは皆様の努であります。我が國は國民皆兵といふ制度でありますから、年頃になれば皆様は一度は兵役に服さなければならぬ義務があります。

又學校で字を上手に書き、本を能く讀んだからこて之ばかりでは立派な人とは申されません。忠君愛國の精神に富む人でなければなりません。これから先も戦争がないとも限りません。昔から「勝つて兜の緒を締めよ」ごか、「油斷大敵」とかいふ言葉があります。誠に尤ものことで、油斷して居る間に諸外國はど

しどし進歩して行きます。皆様は此の諸外國進歩に遅れを取らない様にしなければなりません。

之が爲には能く先生の申されますこと、御兩親様の申されますことを御守りになり、勉強致せば良いのであります。

(陸軍歩兵大佐横山榮治氏講述、氏は本村串橋の人本校同窓の先輩)

### 第三十一課 耕地整理

比々多村の東南部及び岡崎村丸島の地は其の大部分水田にして、米の主産地なるが、舊來の田地は、地勢の複雑なるまゝに區劃の形狀不整、大小不同、且用排水路も不完全なるため耕作上の不利頗る多し。又道路の如きも僅かに車の通ずるものは白根より木津根橋に至るもの、神戸よりこれに連續するもの、丸島よ



り落幡に通ずるもの、串橋より之に連絡するもの、串橋より笠窪に至るもの等數線に過ぎず。其の他の小道路も殆ど數ふるに足らず。橋梁も其の數少く且不完全にして交通の不便少からず。而して耕地の中央を南北に貫流せる鈴川は迂餘曲折せる爲、從來屢々氾濫し其の被害に苦しむこと多年なりしにより、夙に屢々耕地整理を行はんとの議ありしも、未だ實現するに至らざりき。偶々大正十二年九月の大震災に遭ひ、鈴川の堤防は崩壊し、且震災直後の豪雨の爲各所氾濫し良田は流失し、流木土砂等堆積して其の複舊は容易の事にあらず。且小田原急行鐵道の耕地の中央を東西に貫通するありて水利關係にも多大の支障を來すに至り、之が善後の策として耕地整理の實行は一日も忽緒になすことを得ず。ここに於て兩村の有志相圖り耕地整理實行の準

備を進む。一方縣に於ては之と伴なひて鈴川改修の工事を起すこととなり、遂に大正十五年四月中郡比々多岡崎耕地整理組合の設立を見るに至り、石井勝治氏推されてその組合長となれり。組合の地區は比々多村東南部及び岡崎村丸島を包含する區域にして、北は縣道厚木御殿場線及び比々多村白根耕地に接し、東は伊勢原町板戸及び岡崎村丸島部落の高臺を以て境し、南西は大根川及び善波川を隔てて大根村既整理地に對す、鈴川は地區の中央を南北に貫流しその南端に於て大根川及び板戸川に合流す。而して全地區を三區に分ち岡崎村丸島を第一區、比々多村鈴川右岸を第二區、同左岸を第三區とし總面積二萬五千百七十二・七一アールあり。

組合の設立と同時に直ちに工事に着手し、縦横に幅一・八二メ

一トルの耕作道路を通じ、幹線の道路は幅三・〇三メートル又は三・六四メートルとなし地區外の主要道路に連絡せしめ、鈴川には新に菖蒲橋・柳橋・上満寺橋・観音河原橋を架設し、其の他善波川板戸川と合はせて大小四十有餘の鐵筋コンクリートの橋梁を作りて交通の便を圖り、又治水の爲善波川板戸川を改修せり。而して用水路を通じ、排水路を掘り、又井堰を作り、樋管伏越の工事をなし、灌漑排水の設備を完全にし、又舊道路舊堤塘を取崩し、舊水路を埋立て、卑濕の地には暗渠排水工事を行ひ以て耕地の改良をなし、交通にも又耕作にも至便となり、殆んど昔日の面目を一新せり。

工事完了の豫定は昭和七年四月なりしが、組合長はじめ役員の熱心と、全組合員の努力とにより着々工事は進捗し、殆ど完成

の域に達せんとし、今や確定測量に着手し換地の準備に進みつゝあり。

組合費用の豫算總額は十八萬三千餘圓にして、内工事費は約十三萬二千圓なり。

此の耕地整理に依り道路橋梁完成し、交通は頗る便となり、灌漑排水の設備の完成は水利の便を増せり。其の他卑濕の田も良田となり、荒地堤塘も亦美田となる。且整地工事施行により耕作上便利のみならず、地力を増進し二毛作をなし得るに至れり。今や牛馬耕の奨励と、新式農具の利用とは農業經營に一大變革を來さんとす。此の時に當り、本耕地整理の完成を見るは、本村將來の爲眞に喜ぶべきことなり。

### 第三十二課 樂園の建設

「比々多村は良い村だ。」  
といふ。

北に阿夫利山系の山々が起伏して鬱蒼たる森林を養ひ、鈴川及其支流は北から南へ貫流して肥沃な水田を開き、其の間に廣濶な畑地を抱いて居る。此の美しい自然は此村に幾多の産業を與へ、幾多の人材を生んだ。最近迄は小作問題も、政黨の争も、租税の滞納も此の村の平和の扉を叩く事すら許されなかつた。

「比々多村は良い村だ。」  
と私も考へる。

村民は愛村の念に富み、孜々として其業を勵み、歴代の當局者

亦銳意自治の圓滿なる發達を旨とせられ、何事も平和裡に解決して來た事は美しい村風として永久に傳へねばならぬ。

しかしながら彼の大震災は突如として襲來し、一瞬にして此の平和な村から幾多の生命と財産を奪ひ去つた。其瘡痕未だ全く癒えざるに、又もや世界的不景氣の荒波は容捨なく押寄せて來た。悪思想の別動隊も浸入して來た。不景氣退治は始まつた。そして今はその眞最中である。

私は此の頑強な不景氣も悪思想も我が村民の堅固な生命線を、我自治の平和の扉を突破する事は不可能である事を確信するが、同時に其の莫大なる損害は容易に恢復し得ざるものである事も斷言して止まぬ。

「比々多村は良い村だ」

といふだけでは駄目だ。

如何なる天災地變にも如何なる經濟的思想的困難にも、びくともせぬ村とならねば駄目だ。否我々は其の理想の村を建設せねばならぬのだ。

それには綿密なる調査と正當なる農村計劃と、村民の一致團結して止まざる努力とが一圓融合せねばならぬ。

都市計劃は都會を益々發達せしめた。農村には僅に耕地整理事業あるのみで農村計畫は無い。併しながら農村計畫は國家の施設にのみ俟つてはならぬ。農村自身の問題である。

二宮先生は、

「荒地の復興は開闢の大道を以てす。」  
と教へられた。

### 「開闢の大道」

何といふ偉大な教であらう。

比々多村は比々多村民自身の汗と脂に依つて救はれるのだ。鉄と鎌に依つてのみ發展するのだ。

私は最近本村男女青年團員諸氏がこの点に自覺せられ、各種の事業の裡に其の意氣と抱負の片鱗を示して居らるるのを思ふ時、本村の將來に多大の期待を有するものである。

而して未來の村民として最も良き指導と訓練を受け居らるゝ生徒諸君よ。決して現實の農村に悲觀し給ふな。理想の農村を畫け。我等の樂園「比々多村を我等の愛郷の力、團結の力に依つて立派に建設しようではないか。」

## 第三十三課 卒業生

## 一 十六歳の彼

彼名は鈴川清、年は十六歳である。俗にいふ水呑百姓の長男と生れた。尋常科を終つた時、數人の同級生は中學校や農業學校へ進んだ。彼は之を見て羨ましいとも思はなかつた。彼は父の跡を繼いで祖先傳來の農業に従事し、之が改良進歩をはかることによつて社會に貢獻したいと考へてゐた。高等科に入學させてもらつた事は彼にとつてはむしろ父母に對する感謝であつた。さうした學校生活も此の三月で終つた。

愈々父と共に農業に従事する時が來た。父は村でも相當評判の稼ぎ人であつた。特に堅い人正直な人で通つてゐた。従つて家は豊かな方ではないが、信用はあつた。子供に對して十分の愛

を持つてゐたが、仕込については決して緩かではなかつた。

今迄一通り學校で實習はやつたものゝ、それだけが本業となつて、朝から晩まで達者な父と一所に働く事は容易な事ではなかつた。柔い手には容赦なくまめが出來た。それが潰れて握つた鍬棒や鎌の柄に血の流れる事もあつた。風呂から出て、手拭のしぼれないやうなこともあつた。寢かへりの出來ない程身體の痛む時があつた。しかし彼は決してそんな事にへこむやうな者ではなかつた。「かうして一人前になるのだ。」彼は困難の度毎にかう考へ、更に一段の勇氣を奮ひ起した。

彼の頭を往來してゐるものは、將來どんな農業者になるかの問題であつた。文化の發達は如何なる事業も舊態のまゝでは置かぬ。農業ひとり此の儘であるべき筈はない。交通機關の進歩外

國貿易の發達國民の嗜好の變化等によつて起る新種や異種の果樹蔬菜の栽培等、小さき彼の頭にも將來の農村の問題が如何になり行くかを考へずには居られなかつた。

幸に一人の同志と相談して毎月一部の農業雜誌を手にすることが出来た。母校の圖書館へ行くことも休日に於ける彼の樂しみの一つであつた。先輩や篤農者について淳々と説明を求めるところは最もつとめる所であつた。講演や講習會へもよく行つた。かうした彼の上に更に一つの大問題が起つた。

新聞紙上に散見する疑獄事件や、不良青年少女の記事などは、今迄學窓に育つた彼の眼には不思議なものであつた。だんく事實を見聞するにつれて世の中さいふものに疑を生じた。しかし結論に到達した。それは、「我は我の力によつて正しく生きる

のた。」と言ふ事にあつた。勿論之は修身や國史などで熱心に指導して下さつた先生の力が、今芽を出して育ちかけて來たのだ。彼の手からいつも離れないものは土によごれた風呂敷包であつた。其の中は數冊の本と一冊の雜記帳と一本の鉛筆であつた。畑へ行く時も田へ行く時も、休日に旅行する時も、之ばかりは常に彼の手から離れなかつた。さうして少しでも暇のある毎に必ず本を読んだ。批判や感想を書いた。金言警句俚諺、何でも書付けた。時事についての意見も書いた。かうしたものが一冊二冊とだんくたまつて來た。隨時之をくり返しては彼は靜かに考へた。

今や彼を待つものには、補習學校がある。青年訓練所がある。青年團がある。彼は小學校在學中も、休日の晩などよく補習學

校へ来て、後の方で靜かに聞いてゐた。訓練服を着けた先輩が教練をするのもよく見た。演説會には飛入りをして金切聲を張上げて大いに喝采を博したこともあつた。彼は愈々其の方面に向つても本舞台に入るのであつた。十六歳の彼鈴木清。彼の前途は遠い。果して如何なる道をたどり、如何なる者となるであらう。私は彼の前途に幸多かれと祈つてゐる。

## 二 堺より

懐しの郷里に在ます先生、何時も御無沙汰をしてゐます諸先生には昨今の寒さに如何御暮してありますか御伺ひ申し上げます。私も御蔭様で強健で暮して居りますから御休心下さい。晝は工場の繁多の事務に、夜は大阪に通學して昨年關西大學機

械部を末席ながら卒業しました。是も皆先生方の御恩徳の賜であると思ふ感謝致して居ります。

一度參上致し御禮申し上げますが、其の後社用で轉々出張して居りますので其の意にまかせず、延々となつて居ります。先生、私の此の頃は本職の機械とは縁のない外交や工場経営法や何かで、又新しい修業の苦心を味つてゐます。「釣鐘の様な男だ」と工場主から笑はれてゐます。私の前途は是からです。當工場を止めて新しい希望の道に進まうと退社届を出しましたが握られたまゝです。私の様な人間でも何かの役に立つのかと思ふ時苦笑せずには居られません。郷里の友人は人の親となつて居られるのに、何故か私にはまだ其の氣になれず皆から不思議な存在の一とされてゐますが、私には不思議はない

のです。總べての点が一人前にならないうちはと言ふ考で居ります。幼時先生に教導されました通り志を立てて郷里を出た筈の私ですから。

昨年来醫學の方に興味を覚えて参りましたので専門外の畑の土を堀起してゐます。或種の技術的のここですが、學科の方は何うやら今年卒業しましたので、目下實地研究生として毎夜大阪通ひを續けてゐます。

先日老書生の姿を寫りましたので先生の許に一枚御送りします。御笑ひ下さい。依然二十三貫の体重と共に茶目振りを發揮して居りますから。

日支事變の解決もなかなか困難のやうです。勿論軍籍に在る私は何時でも敢然肉弾となる覺悟で居ります。

先生どうぞ御壯健で在す様神かけてお祈りしてゐます。可成り取急いで居りますので、粗雜前後御判讀下さい。

昭和七年三月二日

(大貫友吉君より、君は本村三之宮の人、大正三年度本校高等科卒業)

### 三 石の鳥居

「お宮様の鳥居が出来る。」

之はたしかに晴天の霹靂であつた。

大震災の復舊から復興へ、有る金は皆使つてしまつた。借金に借金を重ねた所へ茲數年間の農産物の下落、その上に世界的といふ大きな不景氣風、どん底にあへいで居る農村の現状、神様の事だが今の實狀では………しかし事實であつた。石の鳥居



を建てる爲に、主立つた二三の者は神官の家に相談に行かれる。氏子の集會は開かれる。着々計畫は進んで行く。それは東京の麻布に鶏卵鯉節問屋をしてゐる嵯川要藏君が奉納されるのであつた。

嵯川君は本村串橋の人で、父を福次郎といつた。早く母を失つた君は、尋常六年を卒業すると伊勢原町の或商店に奉公に出た。それは明治四十一年であつた。しかし將來獨立して店を持つ時の事を考へると、伊勢原町では満足出来なかつた。その時にはもう父もなくなつて居たのであつた。自立自營の決心を固めて斷然上京する事にした。

上京してから、神田の中山鶏卵問屋の小店員となつた。茲には店員が十二人居つたが、中年者である君は随分苦しいつらい

事ばかりであつた。毎日朝から荷車を引いて夜の十一時頃まで小賣店に配達して歩いた。ゴム靴も無い時でしたから、雨雪の日でも素足に草鞋をはいたのであつた。

其の中に番頭になつて、自轉車で毎日小賣店へ御用聞に行くやうになつてから、身体も少しは樂になり、又面白い事もあるやうになつた。やれ一安心と思ふ時にあの關東大震災で、東京十五區の内十三區は全部火災にかゝつて焼野原さ化してしまつた。さうなる事かと思つたが、流石は日本の帝都である。二三年の中に以前よりもよい程に復興した。

大正十四年四月に獨立して小さく小賣兼問屋の店を開いた。家内が店に居て小賣をする。主人である君は小僧同様に、雨の日も雪の中も自轉車にリヤカーをつけて御顧客を廻りながら、御

用聞と配達とをして歩いた。田舎から上京した妻君の父が、そんなに働いて身體を悪くしてはいけなからと注意される程の勤勉振であつた。

斯くすること數年、其の忠實勤勉質素儉約によつて店の信用は高まる。資産は愈々増して來る。此の世界的不景氣に商賣は勿論、其の日の糧にさへ差聞へる者の多いのに店は益々繁昌してゐる。之も偏に神様が高い所から明かな目で見て居て下さるお蔭であると思つた君は、出生地である串橋の雷電神社に鳥居を奉納する事になつたのである。

工事は着々進んで昭和七年四月三日には盛大なる竣工式が行はれ、御影石の鳥居は立派に建てられたのである。此の誠意に神も感應せられて、君の家は愈々無事に商賣は益々繁昌する事であらう。

驚異と羨望と感激とにみちた村の人々に向つて君は次のやうに語られた。

「東京の人が田舎へ行くと、樂をして、きれいになつて美味しい物を食べて、そこらを毎日見物でもして歩いて居るやうに自慢をされるさうですが、東京でも田舎と同じでそんなことをして居つては、しまいには其の日にも困るやうになつてしまします。私は今でも、田舎の人が田畑へ行かれるやうに、短い着物を着て、食物は澤庵の香の物だけで度々食べます。主人の店に居つた時、盆や暮に給料の外に配當をいたゞきました。それは使つてしまふ者が多いのですが、私は獨立して開店する準備に銀行へ預けて置きました。煙草は店員時代に

は絶対にすみませんでした。今日はお客にでも行つた時一寸すふ位です。酒は杯に一二杯位です。店を開いてから今日まで一日も缺かさず。毎日朝日一個をすつたもりて十五錢づつ積立つて居ります。」

と。

これを以つて君の心掛を知る事が出来よう。  
私は我が校同窓の先輩に君のやうな人のあるのを思ふ時心から嬉しくてたまらない。

### 編纂を終りて

本巻を以て比々多讀本の編纂を終りました。尋常科第一、二學年之巻から、同第三、四學年之巻、同第五、六學年之巻、高等科之巻と全四巻。

思へば昭和三年、御大典の記念として前校長重田政三先生によつて此の事が企てられ、不肖私が委員長として同年十一月十五日「比々多讀本練纂趣意書」を發行してから茲に約五箇年。此の間指導の先生は申すまでもなく、村當局の方々、一般有志諸君の直接間接の御後援は非常に大きなものでありました。又委員に當られた訓導の諸君には或は原稿の蒐集に、或は創作に非常なる苦心をなされました。時には一文の資料に數日を費し、又其の創作に三度稿を改められることもありました。特に委員會に於ける誠意と熱とに至つては只感激の外ないのであります。それが爲には貴い休暇も、大切な日曜も、進んで本書の完成に費されました私の不敏と識見の乏しいのが、此の汗と血の結晶に對して十分なる光輝を添へることの出来なかつたことを、今更申すなく思つて居ります。

蒐集された原稿は各學年共百編以上になつておりますが種々の事情で割愛されました。しかし全部綴つて圖書館に備へ、讀方に綴方に之を活用することになつておりますから、寄稿された諸君におわび旁々御了承を願ひます。

馬淵冷佑先生には本書の全部に亘つて一々御指導下され、ひたすら慈父の其の子の成長を輔ける如き御心持であられたことには今更ながら感謝の外ありません。不肖の子「まだく」とお思ひの所の多いのを恐縮致します。

尋常科第一、二年之巻の挿繪は伊勢原町内海一氏の勞をわづらはしました。同氏の技と熱とに對して十分の

敬意を表し、厚く其勞を謝します。

本書に氏名の載つてゐない寄稿の諸君を左に録して、御禮旁之を明かにして置きます。

永澤勝藏君 齋藤仁三郎君 石井誠一君 石井孫太郎君 鋤柄惣吉君 草山大藏君

左記委員諸君に永い間の非常なる好意と努力とを深く感謝致します。

尋常科第一、二學年之卷

望月又三君 青木 茂君 和田源吾君 眞理谷正司君 石井宮太郎君

尋常科第三、四學年之卷

望月又三君 守本玄底君 青木 茂君 和田源吾君 川上英一君 杉山マツ君

尋常科第五、六學年之卷

望月又三君 守本玄底君 青木 茂君 和田源吾君 山口春海君 眞理谷正司君 平田トシ君

高等科之卷

望月又三君 青木 茂君 和田源吾君

本書は例言にも述べたやうに比々多村を知らせる爲に書いたのではありません。此の村に育つてゐる者此の村にふれた生活から生れたものであります。之を機縁として今後續々かゝる生活記録の生れ出づることを希望して止みません。

昭和八年六月二十一日

比々多讀本編纂委員長 江原善藏

昭和八年七月二十日發行

非賣品

神奈川県中郡

著作兼發行者 比々多尋常高等小學校

神奈川県平塚市新宿一、一〇八

平塚印刷社

印刷者 鎌田要助

神奈川県平塚市平塚本宿二、二三四

印刷所 會社 稻元屋書店印刷部

終

